
お隣の勇者さま

来海 由佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お隣の勇者さま

【コード】

N0940U

【作者名】

来海 由佑

【あらすじ】

お隣の三兄弟の長兄ヤマトは完全無欠な生徒会長、末っ子の妹ミコトは超絶美少女。

そして同い年の次兄タケル君は異世界で勇者さまして帰ってきたそうです。

ふうん、お疲れさん。ヘタレはかわんないけど、ちょっとはたくましくなれたんじゃない？

でもさあ、ハーレム属性とかまでつけて帰ってこなくてよかったのよ？

そんな二兄弟を過保護に愛する幼馴染の少女トーコはごくごく普通の女子高生。ちょっぴりドSな彼女がハーレム陣と対決！？
さて、平穏な日々は帰ってくるのでしょうか？

1 . おかえんなさい(前書き)

見切り発車です。

1 . おかえんなさい

黄色い救急車ってどうやって呼ぶんだっけ？

そんな疑問が頭をよぎったあたり、私も相当動揺していたようだ。
「げ、げえ！？ トーコ！」

平和な日常。

よくある住宅街の一画。

隣接する我が家と、幼馴染タケルの家は同じく二階建てで、手を伸ばせば触れるくらい近い。

二人の部屋は偶然にも窓が向きあう場所にあり、お互い屋根越しに行き来できるという、定番青春ドラマのような仕様になっていた。

お隣の三兄弟のうち、二男のタケルは同い年。

ヘタレでお人よし、成績は中の下、運動神経も平凡。

実は顔立ちが悪くないのだが、やぼったい眼鏡と、生来の積極性のなさのせいで、イケてない男子の一員だ。

長男である二つ上のヤマトがイケメンで、成績優秀、運動神経抜群。

その兄が比較対象として有る為、更に冴えなさが際立っている。
ちなみに末っ子はミコトちゃんという女の子でこれまた美少女である。

とはいえ、性根はいいヤツで、現在良好な友情関係を築いている。

わけだが。

夕方、窓の向こうが眩しい輝きに包まれ、何かと思ってみると、その光の中心にタケルがいた。

まるでファンタジーの勇者のような格好をしたタケルが。

「コスプレイヤーデビューおめでとう？」

手にしていた着替えが手から零れ落ちるのにも気づかずにそうい
うと、タケルの顔が真っ赤に染まった。

「ちっち違っていつか早く服着ろ！！ カーテン閉めずに着替えん
なってあれほど言ったじゃねーかよっ！」

夕暮れ時の住宅街に 思春期の少年の悲鳴じみた声が響き渡った。

「あー……トー」？

「……いやあの」

「うん？」

「やっぱり黄色い救急車いる？」

「俺は正気だ！」

一時間後、場所はタケルの部屋。

叫びに集まった家族を誤魔化し、それぞれに着替えと夕食を終え、
トーコはタケルの部屋に窓越しにお邪魔していた。

「信じられないよなあ……」

「うん。学校帰りに光に包まれ、異世界っぽいところに行って、勇
者してきました、なんて言われてもなあ……」

しょんぼりと肩を落とすタケルを見て、ため息。

目の前にはさっきタケルが来ていた防具やらマント。そして、どう見ても銃刀法違反な聖剣とやらがある。

「よっと」

「あ、危ないから気をつける」

「お、重っ!？」

何気に手にとってその重さに驚く。

タケルはこんなに力が強くなかったはずだが。

「ソレ、神聖武器で俺だけが使いこなせるらしい」

「持ってみて」

「ごうか？」

促すのに立ちあがって、剣を手取る。

すっと簡単に持ちあがるそれに、トーコは微妙な顔になった。

「切れる？」

「まあな……。斬れるよ」

「……」

自分が言った『きる』と発音が違う気がした。

一瞬黙ったタケルの顔を見てため息が零れる。

(何を斬らされるハメになったんだか……)

タケルは、気弱と紙一重なくらい優しい少年だ。

聞いたところによる異世界で二ヶ月余りを過ごし、魔王軍とやらを撃退したらしい。

今まで生き物を傷つけたこともなかったタケルがどう過ごしたのかはわからない。

辛いことも多かっただろう。

よく見れば、少し印象も変わったように思える。

容姿が変わったわけではないが、どことなく浮かべる表情が違う。

「まあ、なんていうかさ」

言葉に困ってタケルを見る。

タケルは少し緊張しているように見えた。

久しぶりに帰ってこれた故郷。

「ただ、いきなり誤魔化しようのない姿を見られ、全て説明する羽目になった。」

「自分がおかしなことを言っている自覚はあるだろうし、変わった自分をどう捕らえているのか分からないが、今までと違う自分がどう見られるか不安もあるだろう。」

「どうしよう、態度が変わったら。」

「どうしよう、嫌われたら。」

「そう思っているのが手に取るようにわかった。」

「腐っても幼馴染だ。」

「恋愛感情は互いに皆無なれど、大事な友達……否、手のかかる弟のようで、時には背伸びしたがりな兄のようだと思っていた。」

「それは今も変わらない。」

「だったら、取る態度はたった一つだ。」

「お疲れさん」

「え」

「うん。だからご苦労さま」

「へらっと笑って答えて。」

「茫然とするタケルにいつものように言う。」

「それにタケルの顔が泣きそうに歪んだ。」

「んで、おかえんなさい」

「うん………うん、ただいま」

「必死で涙をこらえて答えたタケルに満面の笑みを送る。」

「そして。」

「それよりさ、二ヶ月まきもどして元の時間軸に返してもらったと
かって話だったけど、明日提出の宿題とか覚えてる？」

「え、!?」

一瞬でタケルの顔がひきつった。

「ト、トーコさま!?」

「ふはは、仕方ない。パティスリーMINTのガトーショコラで手を打とう」

「こっちの金はいつだって金欠だつてのに鬼いいい!!」

勇者サマとやらの怨嗟は、割と心地よかった。

1 . おかえんなさい（後書き）

Q・タケルくんはトーコちゃんの着替えをどのタイミングで見たんでしょうか？

A・トーコちゃんはパンツ一丁でした。ちなみに胸はCカップ。同様のどつきりイベントはすでに3回目です。

恥じらえよ主人公

7 / 1 0 調整、改訂

2 . 日常崩壊の予感

「おはよー」

「おはよう〜」

そんな声が飛び交う通学路をトーコはゆっくりと歩いていった。いつものように起床し、ご飯を食べ、家を出る。

そして、いつものようにタケルの通学時間とずらして家を出る。

これは二人の通常運行な通学風景だ。

なぜわざと時間をずらすのか。

それは小学校の高学年になり、周囲のみんなが思春期に突入した時のこと。

幼馴染で家が隣となれば、通う公立学校も同じ。

だから一緒に通学していたのだが、それが同級生たちには格好のネタに見えたらしく、あの二人はできてる、ご夫婦通学などと呼ばれ大層めんどくさいことになったのだ。

二人の感想は一つ。

あほくさい。

それに尽きた。

二人の間にあるのは純然たる友情で、一種家族愛に近いものだ。わたわたと赤くなって否定、ムキになって怒るといふより、付き合ってらんねー、という結論になった。

ゆえに、二人は学校や通学路など、基本的には時間や道を変えている。

それでも二人の関係が揺らぐことがないのはわかっていたから。

昨日のように、課題が出たら一緒に勉強するし、TVゲームだつてどちらかの部屋に乗り込んで二人プレイすることもある。

悩み事があれば相談に乗るし、困ったことがあれば助け合う。

トーコは一人っ子で、タケルは三兄弟の真ん中だが、親同士の仲が良い4人の子供達は、基本的に四兄弟だった。

お互いに同性の友人はおれど、一番気の置けない相手はやはりタケルであり、トーコなのだろう。

(そんなタケルが勇者サマねえ……)

歩きながら心の中で独白する。

英雄。

勇者。

ヒーロー。

そう名のつくもの。

それはタケルではなく、兄のヤマト兄に捧げられる敬称だったはずだ。

成績良く、美形で、運動神経抜群な生徒会長。

トーコは昔、こんな完璧な人がいるはずがない、もしかして機械なんじゃないの？ と疑ったものだ。

まあ、そのヤマトにもいくつかの弱点があると知って、やっぱり人間だよな、と思い直したのだが。

そんな見目麗しいヤマトの血を引くタケルが、特別ブサイクということはない。

本当はそこそこに整った顔をしているのだ。

ただし、タケルは服装と態度に難がある。

普段から兄と比べられ、常に弟のほうは……と言われてきたタケルは自分に自信を持ってないのだ。

時におどおどと、時に拗ねたように捻くれて、あのヤマトの弟がという注目を受けなかったために、服装も地味にやや野暮ったくして人の興味から逃れようとしてた。

『残念なイケメン』

大雑把に分類するとソレだとトーコは判断している。

まあでも、これで少し変わるかな。

昨日のタケルの表情を思い出す。

自分に少なからず自信を持てた。

否。

『自分自身』というものを手に入れた。

そんな強さをタケルの瞳の奥に見た気がしたからだ。

ぼんやりとそんなことを考えていた時、少し離れたところが何やら騒がしくなった。

「ん？」

(あれは……うちの委員長?)

通学路の一画、一人の女子生徒が制服を着崩した男子生徒に絡まれている。

「は、離してよー!」

「いいじゃん、別に。このままサボろうぜ? なあ」

腕を掴まれ、その腕を取り返そうともがく彼女に、ニヤニヤといやらしい笑みで話しかけている。

トーコのクラスの委員長は学年でも一、二を争う美少女で、密かにファンクラブが存在すると言われるくらい可愛い。

そして、その彼女に絡んでいるのは学年で一、二を争う不良だった。

彼はケンカも強いらしいということで、野放し状態にあるというのが現状だ。

周囲にいた生徒もざわざわと話しながらも近づこうとしない。

そのうち何人がが学校に走っていったので、先生を呼びに行ったのだろうが、さてはて、戻ってくるまでに間に合うだろうか。

トーコもまた困惑していた。

止めたいとは思うのだが、どうやったら止められるものか。怖いとは思わないが、止めるための方策がないことにはどうにもならない。

武道の心得があるわけでもない、ただの女子である自分では、振り払われたらそれまでだ。

それでも。

(まあ、時間くらいは稼げるかな)

そう思って、数歩踏み出した時。

「あー……。サボルのはよくないと思うよ。うん」

どこか困ったような声が二人に投げかけられていた。

(え)

「タケル」

思わず声が零れた。

そこに割って入るように声をかけていたのは、タケル。

周囲の人間がタケルを注視する。

不良もまた。

「なんだよお前！ 邪魔すんな！」

「いやいや、学校に行けるのって凄くありがたいことなんだから、サボルのはよくない。んで、女の子に乱暴するのはもっとよくない」

苦笑に近い笑みで不良を見て言うタケル。

昨日はなかった黒ぶちの眼鏡に野暮ったい髪型。

だけど、その表情に恐怖の色はない。

「うるせええよ！」

「とりあえず、その手を放そうか」

「邪魔すんなつつてんだろ……っ！？」

すっと伸びた手が不良の手首を握る。その瞬間、不良の顔が歪ん

だ。

「は、離せっ！」

慌てて、少女から手を離した不良が、タケルの手を振り払い、握られた手首をさすっている。

その隙にタケルは少女を背にかばうようにするりと二人の間に割り込む。

「この野郎っ！！」

どう見ても弱そうなタケルに少女を奪われたことで、頭に來たらしい。

「どきやがれ！」

喚きながら腕を振り、タケルを殴ろうとする。
だが。

すつと、タケルが風のように動いた。

素早い動きというより、最小限の動きでその拳から逃れ、前に踏み込み。

ドスツという鈍い音がソコで発生した。

不良の身体の影で何が起きたのかトーコには見えない。

タケルが何をしたのか。

それは、不良がずるりと地面に崩れ落ちたことで分かった。

そこに残ったのは、軽く膝を折り、不良の腹部にひじ打ちを叩き込んだままの姿勢のタケルが残されていたから。

意識を失ったのか、地面に倒れてぴくりともしない不良を見下ろすタケル。

「やれやれ、久しぶりの楽しい通学だったのに、朝っぱらから……」
ため息まじりの声は多分本心だ。

タケルの中では二カ月ぶりの通学なのだから。

「えっと………大丈夫だった？」

くるりと振り返り、委員長に笑いかける。

「……は、ハイ」

その微笑みに委員長の顔がぼおつと赤らんだ。

(おわ……)

それにトーコが息を呑む。

周囲の生徒の中で、何人かも気付いたようだった。

(わー、女の子が恋に落ちる瞬間って、コレかー)

ヤマト兄相手にだったら見たことがあったが、タケル相手には初めてだ。

「あ、あの、怪我とか」

「ん。大丈夫大丈夫。それより掴まれた腕とか平気？」

何気ない口調で委員長を気遣って、表情を曇らせるタケルに慌てて両手を振る。

「大丈夫です！ その、あ、ありがとうっ！」

「いや、当たり前のことだからさ」

真っ直ぐ見上げてお礼を言われたことに驚いて、タケルがはにかむ。

その優しい笑顔にますます彼女の目は釘づけになっている。

「じゃあめんどくさいことになる前に行こうか」

足元の不良を一瞥して、歩き出すタケルにひったりと張り付きながら、委員長も歩き出す。

「強いんだね！ えっと……タケルくんって呼んでいい？」

頬を染めて、上目づかい。

その表情を維持したまま傍を歩き出す委員長にタケルも満更でもないようだ。

それを微妙な表情で見送るトーコに気付かないまま、二人は去って行った。

モテてるタケルに嫉妬などはない。ただ。

「何この猛烈な嫌な予感……」

私、このテの予感って割と当たるんだよね、とため息交じりに呟く。

何か、面倒なことが発生する予感。

胸騒ぎに近い感情。

それを思っ
て漏れた
眩き。

その言葉に意識を止めるものはここに存在しなかった。

2・ 日常崩壊の予感（後書き）

6 / 2 4 誤字を訂正しました

7 / 1 1 調整、改訂しました

3・厄介事はごめんです

あれから。

本人いわく二ヶ月ぶりに帰ってきた日から十日間。
事態は急変していた。

「タケルくん、あの、クッキー焼いてきたの？ 食べない？」

「タケル！ そんなものより、高級チョコレートを持ってきたんですの。こつちを食べて下さいませ！」

「食べ物で釣ろうなど、下賤な！ タケル。と、ところで、ごほん、わ、私の手作り弁当などどうか？」

タケルの周囲にいる女の子が増殖していた。

「い、いやあの、……俺、あんまり腹減ってないっていつか……」

三人の少女の様子にたじたじになっているタケルは、完全に逃げ腰だ。

「あんまりおなか空いてないの？ じゃあ、お弁当なんて重たいものはナシだね」

「そ、そんな!？」

「はっ！ 策に溺れましたわね！ ワタクシのタケルにござかしい真似をするからですわ」

「誰が、貴女のタケルなんです。タケル君は……」

「顔を赤らめるな！ お前の物でもないわ!」

「ま、まだ何も言っていないでしょう!？」

「ふん、考えていることなどお見通しだ。おとなしい顔をしてハレシチな」

「貴女こそ潔癖そうな顔をしておいて、浅ましいです!」

「醜い争いですわね。何を言ったとて、タケルはワタクシのものですわ!」

「誰がお前のだ。お前のような高慢ちきがタケルに相応しいとも思っているのか」

「な、なんて侮辱をっ」

(あーあ、またか)

思わずため息が零れた。

帰ってきた翌日、タケルが助けた委員長。

天童スマレは、トーコも見守っていたあのタイミングでタケルにオチていた。

その日の内にタケルへを急接近し、はにかみながらも積極的に接触を繰り返し始めている。

その二日後、同じ学年ながらも、大富豪で高慢な性格ゆえに周囲から浮いていた七宮ミナコは、学校帰りに誘拐されそうになったところタケルによって救われた。

その翌日から、タケルこそ自分の騎士^{ナイト}として、傍に張り付くようになった。

更にその三日後、剣道部のルーキーと言える生徒、鈴成リツカが戦いを挑んできた。

どうやら部に所属していたヤマト兄が三年生になって引退した為、実力が急降下したことを憂いて、ヤマト兄の弟であるタケルならば、と期待をかけてきたらしい。

それに勝利したタケルにリツカもまた、自分より強いうえ、優し

さまで持ちあわせたタケルに恋をしたようだった。

ここままで一週間。

以降、毎日のように三人がせめぎ合っている。

それは周囲にも多大な迷惑と騒動を引き起こしているのだ。

今日は朝のHR前に始まった口論のせいで、一時限目が遅れた。

三人とも個性が強く、教師にすら制御が難しい。

生徒など早々に触らぬ神にたたりなしの姿勢だ。

タケルは三人をなんとか宥めようとしているが、とてもじゃないが収まる気配はない。

本当はしっかりと叱って、コントロールしてほしいものだが、それを責めるのは少し酷だろう。

何しろ、タケルはこれまでモテナイ男子だったのだ。

イケてない、年齢〓彼女いない歴なヘタレ男子高校生。

突然とびきりの美少女ばかり、しかも個性と押し強さはピカイチという少女ばかりに囲まれて、強気に出れるはずもない。

(これがヤマト兄だったらなあ……)

はあ、と更にため息。

ヤマトは幼少時よりこの環境だったこともあり、自衛手段的にある程度抑えることもできる。

だが、タケルにそのスキルはない。

とりあえず今切実に思うのは、早くそのスキルを身につけてほしい。

その一点につきる。

「トーコちゃん」

「ん？」

ほんやりとそんなことを考えていたトーコに声をかける人物があった。

トーコの友人であるチカだ。

「何？チカ」

「いいの？ アレ」

漠然とした問いはちらりとタケルを見ながら。

「何が？」

「だって、タケルくん……トーコちゃんというものがありながら」

「……………は？」

チカの言葉に小首を傾げる。

「だって、付き合ってるんじゃないの？」

「……………はああ!？」

彼女の言いだした言葉に思わず声をあげてしまう。

チカはトーコとタケル、共通の友人でもある。

小学校からの。

「まさか、小学校の頃の騒動信じてたの!？」

「え……………違うの?」

あの騒動から6年余り。

その間、ずっと信じていたらしい彼女に呆れた声を上げる。

「私はからかわれないために学校では離れてるだけだって思ってた

……………」

「とつくに皆忘れたと思ってた。あれは……………」

ため息混じりに説明しようとしたその時、不自然に教室が静かなことに気付いた。

そして直後。

「……………なんですって?」

背後に、気配を感じた。

振り向きたくない。

「ちょっと詳しく聞かせて頂けるかしら？」

正面に立つチカの顔が青ざめていた。

振り向かなくても分かる気配が三つ。

肺の奥から絞り出すような重たいため息をひとつ。

ああもう。

やっぱり厄介なことになった……。

平穏な生活の崩壊はこうして始まったのである。

3・厄介事はごめんです(後書き)

7/11 調整、改訂しました。

4 . ありえない

「さあ！ キリキリ白状しなさい！」

正面に三人の少女。

全て、整った顔に険しい表情を浮かべている。

それを前にして、トーコは半眼になる。

めんどくさいという思いはあるが、恐怖や嫌悪はさほどない。

正直に言おう。

慣れているのだ。

こうした女子の呼び出しに。

ただし、概ねヤマト兄絡みだ。

現在高校一年生のトーコよりヤマト兄は二つ上。

トーコが中学や高校に入学する時には、ヤマト兄は最高学年で立派なファン組織が形成され終わっている。

そこに、幼馴染の女の子が入学してくるとなれば、色々勘違いやら考えすぎやらの乙女が出てくるというわけだ。

(まさか、タケルでこのシチュエーションが起きるとはね)

なんだろう。

ちよつと成長した息子に胸が温かくなるような、ダメ弟の成長が微笑ましいような、うん。

まあ、それを上回る脱力感があるのは否めない。

そんなことをぼんやり考えていると、周囲の三人はますます厳しい顔になっていた。

「ちよつと、聞いているの？」

「ああ。うん、聞いている聞いている」

改めて、少女らに向き合う。

トーコと三人の少女の四人は空き教室の一つにいた。

チ力のせいで発生した軽い騒ぎを、授業を理由に切りあげさせ、昼休みに時間を設定したのはトーコだ。

ちなみにこの場にタケルはいない。

焦って否定していた態度は余計に疑いを増すものであったし、少女らは最初から『タケルは魅力的。そんなタケルに近づく女がいるのは当たり前』という態度だ。

更に言うと、『そんな女にもタケルは優しいから断れないんだろ
うから、代わりに私が』となる。

ゆえに、タケルの言動は三人に信じてもらえなかった。

本人に悪気はなくトーコを心配しての言動だとしても、火に油を注ぐことにしかならないタケルは、むしろ排除しておきたかったトーコだ。

「まあ、本当に一言で言うとなね」

呆れています、と思いきり態度と表情に出す。

「ありえない。これに尽きる」

「……え」

気負うこともなく、当然の事実として告げる。

まるで、これはリンゴですと言うかのような端的な断定に三人が
ちよつと固まった。

「ヤマト兄ならまだわかるけど、タケルだよ？」

「なっ……！」

「それはタケルくんを馬鹿にしていますの!？」

「そうだ!」

「いや、そういう意味じゃなく」

「じゃあどういう意味だ!？」

どうやら言葉選びがまずかったらしい。

褒めると勝手に暴走するくせに、けなすと怒るとはコレいかに。
本当に面倒だ。

恋する乙女の思考回路はなんとなく理解していて、時に微笑ましく思えても、その被害がこちらに向くとなれば話は違う。

「……タケルはさ、ここ十日くらいで急にモテ初めた。それはわか
ってるよね」

「それは、まあ……」

当事者だ。わかっているだろう。

これまでタケルがモテルなどという話がなかったことくらい知っ
ている。

「だから、フィルターがない」

「フィルター？」

「そう。んー……なんて言えばいいかな、『先入観フィルター』？」

「なんですか、ソレ」

三人ともピンとこない表情だ。

「えっと……ヤマト兄は知ってる？」

「タケルのお兄さんでしょう？」

「あ、生徒会長の？」

「無論知っている。ヤマト先輩はすごい人だ」

口々に頷く三人、中でもリツカは直接接したこともあるのだから、
どこか嬉しげに頷いた。

「ヤマト兄はずっとずっと昔から有名だった。ずっと前からもて
たし、確かにすごいんだよね。それは、ヤマト兄の手の及ばない
ところ、知らないところまで噂として広がってた。ヤマト兄の全
てを数倍に美化しながら」

真剣な顔になって言うトーコの話に、いきなり何の話だろうと思
っているのがよくわかった。

「だけど、これは知っていて欲しいことだ。」

「ヤマト兄はずっと近づく人が、どんな風に自分を見てるのか知っ
てた。好意的に近づく人も、その噂に踊らされているんじゃないか

と、悩んだ時期もある。信じられないんだよ、相手が。何を思っ
て近づくのか、何を狙って近づくのか。そう考えずにはいられない。
ヤマト兄だって人間だもの」

当たり前だよ、と呟く。

それをトーコはずっと間近で見てた。

人の好意をどこまで信用していいのか、探り探り接し、人の悪意
をどうすれば煽らずに済むのか、慎重に慎重に見定めて。

トーコはただそんなヤマトの傍にいた。

そしてタケルもまた。

「タケルはそんな兄も、兄に近づく人も見てた。自分が当事者じゃ
ない分、より冷静に」

だから知っている。

下心で近づく人間の卑怯さ、自分しか見えていない恋愛主義のず
るさ、そんなものと無関係に善意で、本当に心配してくれる人、本
当に助けになってくれる人。

「タケルは知ってる。人の汚いところも綺麗なところも」

片手を胸にあてて目を閉じ、タケルを思う。

頼りなく見えても……まあ実際頼りない部分もあるのだが、信用
している部分がある。

「タケルは私が何も言わなくたって、自分で自分が好きな人くらい
見つけるよ」

急にもて始めたからって浅はかに踊らされたりしないで、自分の
好きな人はその目で見つけ出す。

それが誰なのか、まだ分からないけど。

「私なんかを牽制してくらいなら、他にすることがあるんじゃない
じゃない？」

じつと彼女らの目を見つめる。

そこに走る動揺。

そう。

本当は無視していてもよかった、彼女らの呼び出しに応じた理由。それがコレ。

これを言う為に。

「じゃ、私戻るから」

「え。あ……」

「ま、待ちなさい、まだ話は……」

「終わった。私が言いたいことは全部言ったし、タケルに恋愛感情を抱くことはあり得ないということも答えた。もう何も話すことはない。後は」

立ち上がり、教室の扉に向かいながら答えて。

ドアに手をかけた状態で振り向く。

「ただ、見てるだけ」

その言葉に三人が息を呑んだ。

「じゃ」

軽く手を振って、そこから退室する。

数秒後、室内で何か叫ぶ声が聞こえたが、トーコは一切無視して、教室へと続く廊下を歩きだした。

4 . ありえない（後書き）

だんだん、お気に入り小説登録が増えてまいりました。
皆さんのご愛読に心からの感謝を。
ありがとうございます。

7 / 1 1 調整、改訂しました

5 ・ 心配なトコ

すたすたと、ごく普通の足取りで廊下を進むトコ。
そのトコがある教室の横を通り過ぎようとした瞬間、その教室のドアが開いて両腕が伸びてきた。

「っ！」

声を上げる間もない素早さでその両腕はトコを抱え込み、教室に引き摺り込み。

そして、胸の中に包みこんだ。

「ちよっ!？」

「……しー……だよ、トコ」

驚き暴れようとしたトコの耳に、心地よい美声が囁かれる。
それを受けたトコの目がまんまるに見開かれた。

「……………何やってんの？ ヤマト兄」

驚いた表情で見上げ抵抗をやめたトコに、トコを教室に引き摺りこんだ両腕の持ち主。

タケルの兄であるヤマトは艶やかに微笑んだ。

後ろ手でドアを閉めたヤマトはトコを腕に抱いたまま、座り込んだ。
んだ。

当然トコもその場に座ることになる。

背中をドア近くの壁に預け、両足を投げ出して座るヤマトの膝の間に座り、その背をヤマトに預けるようにして。

その体勢になってから、ヤマトは満足げに笑って、両腕を緩くトコの腰にまわした。

「なんかすごく久しぶりな気がするな。トコ、元気？」

「……割とちよくちよく顔を合わせてる気もするんだけど」

「顔を合わせるだけでしょ。挨拶くらいしかしないじゃない」

「まあねえ……」

こつんとトーコの頭の上に自分の顎を置く。

嬉しそうなヤマトに困った顔をするしかない。

「こういつとこ見つかったらまずいんじゃない?」

「大丈夫。ここには誰も近づかないようになってるから」

ちよつと見上げて、問うトーコに返される言葉の意味。

それを聞いて、納得したという小さくうなずく。

「カナメ先輩ね?」

「うん」

カナメ先輩。

それはヤマトの公認親衛隊隊長。

ヤマトにはファン組織としての親衛隊が存在し、その男子部、女子部の統合長を治めるのが彼女。

ある意味ではヤマトの秘書と言えるかもしれない。

これが、トーコがヤマトを心配する理由だった。

トーコは中学時代に、学校倉庫に閉じ込められたことがあった。

犯人はヤマトに恋情を抱く女生徒達。

一晩、行方不明で捜索願まで出す騒動となり、青ざめた犯人の自首によりトーコの居場所が判明、保護されたのだ。

その事件のことを、ヤマトはとても気に病んでいた。

俺のせいでトーコが。

ごめん、トーコ。

ゴメン。ゴメンな。

朝になったら誰か見つけてくれるでしょ、あー、おなか空いたな

あ、などと呑気に一夜を過ごしたトーコを待っていたのは、ぎゅうぎゅうに自分を抱きしめながら謝罪するヤマトだった。

もう、トーコがいくら『大丈夫だよ』と言っても、その耳には届かない。

翌日からヤマトは自分のファン達の統率に入った。

上下関係、情報伝達制度。

誰かが暴走して不祥事を起こさないように。

自分の周りの誰かが傷つかないように。

それは、ヤマトが今まで避けてきた、自分の偶像化に近い行動だ。本当の、素のヤマトを見ることのできる人間が限りなく少なくなる。

飾らないヤマトを見る人は家族とトーコだけになった。

信頼する親衛隊長のカナメには気を許しているようでもあるが、それでも一線を引いているのだろう。

トーコが心配するのは、ヤマトの孤独が癒されなのままなこと。

ヤマトを理解する彼女が早くできて、傍に寄り添って欲しいと思うのに、おいそれとは近づけない。

作られたヤマトしか見えない。

それは、とても寂しいと思うのだ。

タケルよりもずっとずっと心配なひと。

だが、今日のところはトーコよりもヤマトの方が心配度が大きいようだ。

「トーコ、大丈夫？」

「ん？ 何が？」

「呼び出されたって聞いたからさ」

「……………もう知ってんの？」

朝のHR前の約束を二学年上のヤマトが把握している。

ヤマト親衛隊の情報網はすでに一年まで手が伸びているのだとわ

かる。

「そりゃあね」

腰にまわした腕をぎゅっと引き寄せる。

「ヤマト兄、ちょ、苦しい……っ」

「どつしてトーコが矢面に立ってんの。ダメでしょ、そついうことしたら」

「あつ……」

『トーコは普通なんだから』

敢えて言葉にしなかった想いに口ごもる。

それはトーコを否定するのではなく、トーコの無茶をたしなめるもの。

今までにいくつかの無茶を行い、その結果心配をかけた事実があるだけに反論できない。

「俺は、トーコには今まで通りでいてほしい。トーコがトーコであるなら、それが『普通』ということならそれでいい。だからあんまり無理はしないこと」

「はあい」

その声は真剣でトーコも受け入れるしかない。

「今回はちゃんと伝えることが必要だと思ったからさ。向こうのの方はわかんないけど、私なんかを気にしてる場合じゃないでしょつて釘はさしてきた」

「……トーコはタケルが変わった原因を知っているんだね？」

「うん。ヤマト兄は聞いてない？」

「ああ。……それを聞いてトーコはどう思った？」

「どつって……」

「悪いことだと思ったかどうか、ってこと」

「ああ……うん、それはないよ。タケルはちゃんと間違えずに進むよ」

「じゃあ、大丈夫かな」

弟を心配する声に口元がゆるむ。

心配しても、押し付けたり、無理に聞き出したりしない。
そんなヤマトを尊敬する。

二人の兄弟の絆が嬉しくなった。

そして、その中に自分の感想が全面的に取り入れられる。
その信頼がどれだけ幸福なことか。

「タケルに彼女できそう？」

「どうかなあー……あの三人の努力次第、と言いたいところなんだけど」

タケルの目に恋情を引き起こす熱が見えないことが気にかかる。

「ところでヤマト兄は？」

「俺？ 俺が一等大切な女の子はトーコだよ」

「もう！ そうじゃないよ！ ソレ、妹としてでしょー！」

「バレたか」

背中が笑いで震える。

その心地よさに怒る気も失せて。

「……………ヤマト兄もさ」

「うん？」

「誰が見つけることができるよ、きっと」

「……………」

「その時までさ……………ううん、その後も。私はいるから」

「……………ああ」

心からの想いをこめた声で呟くと、返される囁き。

声音に、隠しきれない寂しさと諦めを感じて、目を伏せる。

それから。

二人、空き教室で身を寄せ合いながら、ぬくもりだけを共有した。

5 ・ 心配なほど（後書き）

7 / 1 1 調整、改訂しました

6 ・ 変わりゆく世界（前書き）

今回はタケル視点でございます。

日間ランキング10位ありがとうございます……！

6 . 変わりゆく世界

「うつつう、大丈夫かな、トー」

『絶対来ないでね』

びしっと指を突き付け、釘を刺されたタケルは教室で悶えていた。

「おい、タケル、昼飯は？」

「あ、うん、食べるけど……」

「じゃ、ここ借りるな」

タケルの前の席の生徒に声をかけて、正面に陣取ったのはマモル。

「食おうぜ」

持参の弁当を机の上で広げ始めるマモルに促されて自分の弁当も取り出す。

「……………へへ」

「……………なんだよ？」

その様子を見て、ちよつと笑うマモルに首をかしげる。

「お前と食べるの久しぶりだなと思ってさ」

「あー……………そうだな」

ここ最近はこの三人がずっと傍にいたからだ。

彼女らは他の誰かがタケルに近づくとびに警戒する。

女子なら敵視するし、男子なら眼中にない。

思えば、この騒動が発生する前はマモルを始めとした数名で昼飯をとっていたのだった。

そのメンバーにちらりと目線を送ると。

さっと目をそらされた。

「あ……………」

「あ……………まあ気にすんな」

傷ついた表情を浮かべたタケルに気付いたのだろう。マモルが取

りつくるうように笑う。

「……みんな、戸惑ってるだけだ」

「……うん」

ずしつと胸の奥に重たいものが生まれた。

何度も見たことのある光景だった。

何度も見たことがある目だった。

兄の周囲で。

(ああくそ……)

なんで自覚していなかったのか。

三人に振り回されて、それ以外が見えていなかった。

ヤマトは昔からモテていて、その周囲の男からこんな風に避けられていた。

だからヤマトはいつも周囲に気を使い、女子にはかり構うようなことはしなかったし、均等で平等な態度を心がけていた。

だが、タケルはどうだ。

今まで仲が良かった男友達をほったらかしで、急に学年でトップ3に入るような美少女とばかり戯れている。

まあ、実際戯れているという程、楽しげには見えなかったのだが、どちらにせよ、関わり合いになりたくないと思われるような状態であった。

自分だったら。

今までモテてなかった友達がそんな風に美少女に囲まれ、急にこちらを相手にしなくなったら。

きっと距離感を感じて、同じようにしているだろう。

三人が離れた隙にでも、話しかけてくれたマモルの存在に感謝する。

マモルはトーコにとってのチカと同じく、タケルの小学校からの友人の一人、悪友と言ってもいいかもしれない。二人でしょっちゅう悪戯をしていた。

「トーコちゃんも大丈夫だって」

表情を曇らせたままのタケルを宥めるようにそう言つマモルをちらつと見上げる。

「お前も俺とトーコが付き合ってるって思ってた？」

「いんや、それはねーよ。思ってたらとっくにぶん殴ってるよ」

「え。なんで」

「俺、トーコちゃん初恋だもん」

「はあああ!？ ちよ、知らなかった! 言えよ!」

「言つかよ! だって、お前、隠すのとか嘘つくのとか苦手だし、変に気い遣いそうだし」

「いやそれは……うん、でも……ええええ……」

友人付き合いをしていて十年余り。

衝撃の事実発覚。

「とっくに振られてるけどね」

「え。告白もしたの?」

「まーな。即答で謝られたわ。あんまり聞くな。泣くぞ」

「あ、ごめん。……でもいつ頃?」

「中1んとき」

中学一年生の時、というと、4年前。

思い出す。

思い出して、胃の腑に重たくて冷たいものが満ちた。

それに慌ててうつむき、表情を隠す。

(あの頃は、まだ)

「トーコちゃん、好きな人がいるんだって。一応お前か、兄貴か聞いたけど、どっちも違つて言つてた」

「うん」

「知つてたんだろ」

「まあな」

「だから、なおさら言いだせなくてな。トーコちゃんが他の人を好きだと知つてて、俺がトーコちゃんを好きだなんて言つたら、頼ん

でもないのに勝手に悩むだろ。お前」

「……………」

否定できない。

確かに親友と、トーコと、トーコの好きな人の間で頭を抱えて悩みまくるのであるう自分を自覚している。

「トーコちゃんはさ、同じ年なのに、ずっと年上の女の子みたいな、早熟なコだったから尚更ドキドキしてた。考え方もしっかりしてて、ほんとに中学生かよって思うくらい」

「……………うん」

「だから大丈夫だって。お前が困ってんの気付きもしないで暴走してるアイツラよかずっと大人だから、適当に転がしてくるだろ」

こう掌で、と言いつつ、掌を上に向けて何かをそこで転がすような仕草をするマモルに苦笑する。

「まあ、うん。……そりゃそうかもしんないけどさ……。それでも俺はヤマト兄みたいに上手にできないんだよな、って思ったら、やっぱちょっとヘコム」

「無理もないさ。お前、こういうの初めてだし。つか久々に聞いたな、その兄貴みたいにな手くできないっての」

一時期のタケルの口癖だった。

兄と比べられて辛かった。

兄が妬ましいと思ったことは、少くない。

反抗してかみついていた頃もある。

だけ。

そうするうちに気付いた。

兄が自分の傍に当たり前のように存在する悪友達のように、相談したり遊んだり、ハメをはずしたりする友達がいないことに。

兄は一人だ。いつだって独りだった。

傍にいてやれるのは自分と、家族と、トーコだけだった。

それなのに自分は何をくだらない虚栄心で反抗しているのか。

多分、トーコはずっとそれを知っていた。

だから何も変わらず、ヤマトと親しんでいて、ヤマトも溺愛というレベルで可愛がっていた。

目が覚めたような気分で反抗をやめた時、嬉しそうに笑ったヤマトの表情をタケルは忘れない。

『特別』な人間には『特別』な苦悩がある。

普通である自分には縁がなくても家族なんだから、それをわかってやらなくては、と思ったものだ。

まさか自分にその苦悩が降りかかってくるなど思いもせずに。

「……………あー……………もう」

思わず疲れ切ったためいきが零れる。

「疲れてんなあ」

「うん、疲れた」

がつくりと肩を落とすタケルを気の毒そうに見る。

「マモ」

「なんだよ」

「あのさ、俺頑張るからさ」

「あん？」

「ヤマト兄とかにも相談してがんばってみるから、友達辞めないでとりあえず、本格的にあの子らをなんとかしなくては。

好意が嬉しくないわけではないが、この状況は彼女達にとってもよいものではない。

自分の周囲に集まる少女達をみて気付いたことがある。

彼女らはそれぞれの個性、我の強さが原因で周囲から浮いている。

彼女達も又、ヤマトと同じ『特別』な苦悩を抱える人だ。

(気付かなきゃ、拒否して終わりだったかも知れないのに見捨てられない自分はやっぱりお人よしなのだろう。

脳裏に一人の少女が浮かび上がる。

煌びやかと言えるような見事な金髪と、透き通る空のような蒼い瞳の少女。

二ヶ月ほど、ほぼずっと行動を共にした少女。

いきなり飛ばされたあの異世界の、彼女の国の人たちを見捨てられなかったみたいに。

目に届くところにいて、自分の力で何かできる人なら、助けてやりたいと思うのだ。

ヤマトにあの笑顔を浮かべさせてあげたみたいに。

「馬鹿だなあ、お前」

そんなことを考えているタケルの上から、深いため息が降ってきた。

マモルだ。

「そんなこと、言うまでもないんだよ」

「へ？」

「お前の周りがなんて言おうがさ、俺は友達をやめる気はねーし」

「マモル……」

その言葉に嬉しくなって微笑む。

目頭が熱くなる。

友人というものがどれほど大切なものなのかを再確認。しかし。

「あ、でも、俺。騒動巻き込まれんのご免だから、あいつらいるときは近づかないから！」

「この薄情者おおおお！ 助けるよ！」

「だが断る」

「いい笑顔してんじゃねええー！」

やはり、当分の間、タケルの苦勞は続くようである。

6 . 変わりゆく世界（後書き）

予想以上のお気に入り登録数におののいています。
失速しないよう、がんばりますのでよろしく願います。

7 / 1 1 調整、改訂しました。

7・ 貴方だけしか見えないなんて、許さない(前書き)

本作品に、ハーレム系、又はハーレムヒロインを批難する意図はありません。

ご了承ください。

7 . 貴方だけしか見えないなんて、許さない

トコが釘をさして、三日目。
その日も授業は中断していた。
(まああの程度の忠告で止まれるくらいなら、タケルでどうにかなるわな)

タケルの周囲に陣取っていた剣道部のリツカが、数学の問いを間違えた。

それをお嬢様気質なミナコが鼻で笑い、そんな問題を間違えるなんて、タケルに相応しくないなどと言い出したのだ。

慌てて、それを仲裁しようとしたタケルだったが、当のタケルが間違っていたのをいいことに、委員長スマレはタケルに優しく教えてあげようとして、他二人が、抜け駆けするなと騒ぎ出す。

今日の騒動の一連はそんな感じ。

ここ数日、三人がお互いの隙を探し牽制しあうせいで、こうした騒動が起きていたのだ。

教師もまた仲裁に入るのだが、三人の暴走っぷりは測り知れず、『勝負しなさい!』『望むところよ!』なノリで教室を飛び出していったこともあった。

それをほったらかしにできるタケルではない。

結局授業に参加できず、成績急降下フラグがびんびん。

ただでさえも頭がとびぬけて良いというわけではないのに。

このクラスの数学担当教師は気の弱い眼鏡中年だ。

仲裁どころか、どう声をかけるべきかおろおろしている。

「今日は長くなりそうだね」

隣の席のチカがこそつと囁いてくるのに小さくうなずいて、深いため息を零す。

「仕方ない、か」

これ以上ほおっておくことはタケルの立場すら危うくする。どうしてあの三人は気付かないのか。

そう思いながら、がたんと音を立てて立ち上がる。

「……………」

その音に振り返った三人とタケル。

中でも三人の少女に緊張が走った。

あれだけきつぱり言ったのに、まだ疑ってるのか。

いい加減気付いてもよさそうなものなのに。

(私の立ち位置は恋敵ではなく、むしろ小姑だっことに)

タケル達の方を見ずにトーコは椅子の位置をぐるりと回す。ちょうど正面にその騒動が目につく向きに。

そして、そこにゆったりと腰かけ、膝と腕を組み。

「……………」

無言でそちらを見つめた。

完全なる傍観姿勢。

監視体勢と言ってもいいかもしれない。

その行動にタケルはぼかんとし、三人はたじろいだ。

「な、何よ。なんでこっちを見るのよ」

「ん？ 私、こないだ言ったよね」

「な、何を」

「私はただ、見てるだけって」

「そ、それはそうだけど」

本当に真っ直ぐに観察されるとは思ってたのだらう。

「言いたいことがあるんなら言いなさいよ!」

「口出してほしくないんじゃないの?」

「そっやってじろじろ見られるよりはましだわ!」

キャンキャンと高い声でわめきながら噛みついてきたのはミナコ。今回の騒動の引き金を引いた人物であり、トラブルメーカー。

トーコとしては一番の要注意人物。

「じゃあ口出ししてもいいのね？」

「い、いいから言いなさいよ！」

(簡単に釣れるなあ……。ちよろすぎて複雑……)

わざと意識を引き寄せるように音を立てて座り直したのも、はっきりわかるように観察したのも、彼女を煽る為だったトーコだ。

「発言権を貰ったところで言わせてもらっけどさ」

ここでざくつと一撃入れておいてあげよう。

その無駄に高い虚栄心をたたき折る為に。

「視野が狭すぎる。余りにも幼い。行動が小学生レベル。つまりは常識を一から勉強しておいで？」

あくまでも優しい声で、ゆったりと微笑んで、トーコは毒を吐いた。

「な、な、なんですって!？」

「ちょ、トーコ!？」

いきり立ち、声を荒げた彼女にふわりと極上の微笑みを送る。

「平気で授業の妨害をしておいて、それが真つ当たでも思ってたの?」

「わ、わたくしは別にそんなつもりじゃっ!？ わたくしはタケル

のことを……」

「責任はタケルに押し付けるんだ。ふうくん」

最後まで言わせない。

責任転嫁は許さない。

「そんなことはありません！」

「じゃあ、タケルには関係ないんだ？ この騒ぎも度重なる授業中断も全部貴女一人のせい？ 違うよね、必ずタケルが巻き込まれるよね。ねえ、それでタケルの立場がどうなるかとか考えたこと、ある?」

「立場、って……」

「いい迷惑だつて思ってる人たちにとって、タケルは元凶だもん」
「なっ！ ではタケルを貶める者がここに居るってこと!？」

叫んで、険しい顔で教室を見まわす。

「うん、いるよ。タケルを貶めるヤツ」

「誰ですよ!？」

軽く答えたトーコに詰め寄るミナコ。

そのミナコにトーコは人差し指をつきつけた。

「この人」

「……………え、わ、わたくし?」

「そう」

詰め寄ってきた分、二人の距離は近い。

ミナコの目には既にトーコしか映っていない。

その状態で、優しく言い聞かせる。

「何度も何度も授業を中断させて、周りの反感をあおり、タケルを見る周囲の目が変わっていることにも気付かず、更にタケルを貶め続ける人。ねえ、本当はタケルを嫌いななの?」

すぐそばでマモルとチカが青ざめて震えていた。

「うわ、ひっさしぶりにでた……………ドストーコちゃん」

「……………平気な顔してたけど、本当はずっと怒ってたんだね……………」

「正直に言っていていいんだよ。実はタケルを嫌いなんでしょう?」

タケルがどれだけ人に嫌われてもいいんでしょう? 授業中断で成

績落としてもかまわないんでしょう?」

「わたくしはそんな、そんなつもりじゃ……………」

「楽しい?」

「え?」

「タケルが困ってるの、楽しい?」

「ちが、……………違うの、私……………」

「タケルが嫌われていくの、嬉しい? ねえ、そんなことして、好きになってもらえると思ってるんだ?」

じわりと涙が目じりに浮かぶ。

カタカタと震えながら、後ろを見ると、タケルがこちらを見ていた。

嫌われる？

嫌われるようなことをしていたの？

頭の中がそれで一杯になる。

「わ、わた、わたくし……っ！」

ぼろっと涙がこぼれだし、慌ててそれを手でぬぐう。だが収まる気配はなく。

「っっっ！」

ぱっとまわれ右して教室を飛び出した。

「あっ！ ミナコちゃん」

それに続いて、タケルは教室を飛び出そうとする。

「タケル」

それを一声で呼びとめて。

「っっっ、ちょっと言い過ぎ！」

「わざとだもん」

顔を歪めての苦言にさらりと返す。

先ほどまで浮かべていた凶悪な微笑はもうない。

いつも通りのトーコの表情。

「私がここまで悪役やったげたんだから、慰めるときの声かけは慎重にね。こう、嘘じゃないから改善してほしいけど、嫌ってないから、みたいな感じがベストかな」

「おま……ああもう！ 後で話があるから覚えとけ！」

そのアドバイスに全部作戦であったことを知り、呆れ返る。

（ヤマト兄に矢面立つなって言われてんのにっ！）

ヤマトから直接そう聞いていたタケルの心に苛立ちがわきあがるが、今はその話をしている場合ではない。

「行ってくる！」

「行っつら〜」

7 . 貴方だけしか見えないなんて、許さない(後書き)

やらかしたトーコちゃんです。ハイ。

DS降臨。主人公は基本的にDSです。

おおおう。

お気に入り登録が400名を超えました。

日間ランキング8位ありがとうございます！

7 / 1 1 調整、改訂しました。

8 . お説教(前書き)

お気に入り登録が500名突破！
ありがとうございます。

「うん、じゃあ、とりあえずトーコ」

につこりと笑って見下ろして、指先で自分の足元を指し示す。

「正座」

「……………ハイ」

その日の夕方、いつも通り家に帰ろうとしたら、家の前に立っていたヤマト兄に捕獲されました。

おばさんトーコ借りますね〜、いいわよ〜。好きにしちゃって〜、じゃあ、お言葉に甘えて。荷物は玄関に置いときます、あらありがとう。

そんな会話を茫然と聞いているうちに荷物は取り上げられ、自宅玄関に置かれたかと思うと、そつと肩を掴まれた。

「じゃ、行こうか」

死刑台に上る囚人の気分です。

「三日前に釘刺したばかりだよね？」

「ハイ……………」

お隣のリビングに正座させられ、目の前に仁王立ちしているヤマトからそつと目をそらす。

あいかわらずの情報の早さが今日ばかりは恨めしい。

だからこそ、今日はヤマト兄が生徒会のお仕事があるうちに家に

帰ろうと思っていたのに、なぜ先にいるのか。

「そんなのサボってきたからに決まってるでしょう」

「いやダメでしょ、サボっちゃ！ 生徒会長が……ってかそれより、人の心を読まないでください！」

「トーコがわかりやすいんだから仕方ないでしょう」

「仕方なくないよ」

「仕方ないの。それに仕事より、トーコの方が大切に決まってるでしょう」

愛情のこもった言葉を嬉しいと思うよりも、ひしひしとのしかかる圧力に縮こまる。

「なんでやらかしちゃったのかな？ トーコ」

「え、ええと……」

「タケルも怒るくらいってことは、派手にやったんでしょ？ 小学校でタケルが俺と比べられていじめられた時と同じくらい？ ミコトをいじめた悪ガキの心に消えない傷をつけた時くらい？」

「いやその……」

「そう、それよりもっとか」

「あおう」

「あの時も、俺とタケルで大分叱ったと思うんだけど忘れちゃったのかな」

「じゃ、喋らせて下さい……」

怒涛のお説教プラス、思い出さたくない黒歴史発掘に呻く。ついでに言うつと、今日の出来事も確実に黒歴史行きだろう。

「じゃあ、喋っていいよ、どうぞ」

「うん、その、ね」

ようやく喋ることを許されて、ちろつと見上げる。

「最初はね、本当に見てるだけにしようと思ったの。だけどね……
どんだんエスカレートしていくうちにイライラが増えてきてね」
「もじもじと手を動かしつつ、視線をそらす。」

「今日も、椅子を向けて見てるだけで白けて座るならそれもよしと

思ったんだけど、詰め寄ってこられて。軽くこう釣り上げてみようかなとわくわくしてきちゃって、煽ったらこうひょいっと

手に釣竿を持ったような仕草。そして、それを引いて見せて。

「簡単に釣りあがったのでつい」

「ついじゃないし、人を釣り上げるんじゃないの」

「よく言えば純粹だけど、悪く言えば単純。周りも見えてないみたいなので、視野を広げてあげようかなあと」

「広がると同時にトラウマが残る。変に逆恨みされたらどうするの。まったく」

ぶつぶつと小言で呟いてから、諦めたように吐息をつく。

「じゃあ、これからトーコが注意しなくてはいけないことは何？」

「えっと………彼女がいじめられたことで目覚めてMへの道を…

…

「トーコ？」

張り付いた笑顔のまま、短い呼び声。

一瞬で重くなる空気。

「ええええと、逆恨みで仕返しされないように気をつけることですよ！」

「よろしい。………もう、ここまで事態が進んだら、俺とあんまり接触しないようになんて無駄かな。せつかく俺が、トーコに近づかないようにしてたのになあ………」

「面目ない」

「カナメにも目を配るように言ってるから」

「え。そんな、カナメ先輩に申し訳ない」

「いいんだよ。カナメもトーコを気にいってるんだから」

「そうなの？ 気にいってもらえるようなこと何かしたっけ？」

「さあね」

カナメに同じことを聞いて、含み笑いで内緒ですと言われたことを思い出し、ちょっと口をとがらせる。

「とにかく、何かあったら、俺、もしくはカナメも頼ること。いい

ね

「はい」

「よろしい」

素直な返答に満足げにうなずいて、頭をぐりぐりと撫でる。

「あのう、ところで……」

「うん？」

「もう正座は解いてよろしいでしょうか……？」

「……………」

「ちょ、そのごうごうした指の動きは何、や、ちょっと待って……！
触らないで……あーっ……！」

お隣に「トー」の悲鳴が響き渡った。

8・お説教(後書き)

7/11 調整、改訂しました。

9 ・ 普通の定義（前書き）

ぐだぐだとタケルが考えています。

9 . 普通の定義

その日の夜。

タケルは自室で過ごしながらふと窓の外を見た。

正面にあるトーコの部屋。

カーテンが閉まっていて中はうかがえないが、電気がついているところを見るとまだ起きているのだろう。

課題中か、読書中か、そんなところだろう。

付き合いが長ければ行動だつてある程度読めるものだ。

今日一日の出来事と、ミナコを宥めるのに苦労したことを思い出しながら、ため息を零す。

そして、どうしてこんなことになったのかをしみじみと思う。

あの世界から返ってきた日。

正直な話、すごく不安だった。

あそこで経験したこと。

手に入れたもの。

失ったもの。

全てなかったことにして、元の生活に戻る。

自分しか知らない世界のことは他者には理解されないだろうし、否定や異物を見る目で見られるのではないかと思った。

だけどトーコは。

『お疲れさん』

全部飲み込んで、そう言って。

『んで、おかえんなさい』

不安定な心を宥めるように笑った。

それはとても有りがたいもので、涙がこぼれそうになった。
その瞬間思い出したことがある。
ヤマトとトーコについて話した時のことだ。

「トーコが普通？」

予想もしないことを言われた、という顔でヤマトが繰り返した。

「ないよ」

そして、端的な否定。

「え？」

言われて首を傾げる。

トーコはほぼ全ての項目において突出するものがなかったから。
色々と得手不得手はあるものの、それも特筆するほどのことでは
ない。

いつも平凡で自然体で、『ありえねーだろ』と日々思わされる兄
や妹とは違ったから。

「お前には分かんない？」

「うん」

「そっか。まあ、分かんないか……そうだな、今のお前だと分から
ないよな」

くしゃくしゃと自分の頭をかいて、きよとんとしているタケルを
見て困った顔になる。

「分かんないお前でいてくれた方が、お前にとってはいいかもしれ
ないな」

そう言っただけ苦笑した。

とりあえずさ、と口調を改める。

「お前もトーコもさ、『普通』とか『特別』に捕らわれ過ぎだと思
うんだ」

「……………」

その言葉にう、と動きが止まる。

兄がそのスペック故に苦勞していることを知って、当たり前
の兄のように接しようと思ってもなお、拭えない劣等感がタケルには
ある。

それを指摘するような言葉に、罪悪感が胸を占める。

「いや、ごめん。そういうつもりじゃないって。そうじゃなくてさ、
今はトーコのコトな」

そんなタケルに気付いて、ぐしゃぐしゃとやや乱暴に頭をかき混
ぜる。

話をそらすようにトーコの名前を上げて。

「トーコは大切だ。俺にとっても、ニコトにとっても、ある意味で
救いなんだよ。恋愛感情の有無は関係なくね」

本当に大切に仕方がないものを語るように、目を細める。
いつか、分かるかもな。

そう笑った笑顔に言葉をなくした。

(あれって、こういうコトだったのかな)

ぼんやりとした思考の中でそんなことを思う。

目まぐるしく変わる周囲。

好意。悪意。嫉妬。打算。

変わった自分と、変わった周囲。

その中で唯一変わらない人。

その存在。

『トーコ』

兄が呼ぶと、

『何、ヤマト兄』

と答える。

媚も嫉妬もない声で。

『トーコちゃん』

ミコトが呼ぶと、

『どうしたの？ ミコトちゃん』

と笑顔を返す。

ただ妹を愛する姉の顔で包み込むように。

例え、自分の容姿が醜くても、頭が悪くても、ただ自分でありさえすれば受け入れてくれると、確信させられる。

トーコも自分も周囲も、『普通』の人間だと思っていた。

ここで言う普通とは、十把一絡げの平凡な、という意味だ。

同じ普通の人間からすれば、トーコは取るに足らない人物に見えるのだから。

だけど、特別と呼ばれる人達から見れば違う。

特別視される人間というのは、大多数が占める枠からはじき出されるのに等しい。

自分がそうなって初めて実感する。

人の輪から外され、注目され、沢山の感情を押し付けられること。それが時に苦痛であることは否定できない。

だけどトーコだけは。

変わらずにいてくれた。

今なら分かる。

トーコはいつだって、昔からヤマトやミコトを守ってきたのだ。

そして、今は自分を守るうとしてくれている。

悪役をかってでてくれたのもそうだ。

きっと対象が自分でなかったら黙殺しただろうし、肩をすくめてマイペースに過ごしていたのだから。

有り難いと思うし、嬉しい。

ただひとつ、トーコは分かっている。

そうやって、トーコが三兄弟を守りたいように、タケルだってト

トーコを守りたいのだ。

大事な幼馴染。

どうすれば、彼女を守れるのか。

(そういえば)

ふと、ある人物の姿が頭に浮かぶ。

『彼』なら、どうするだろう。

ヤマトとタケルにとってのヒーローで、母方の伯父。

ヤマトの特質は母方の遺伝らしく、母もまた『特別』の一人だ。

その母の年の離れた弟であり、母も、ヤマト兄も、自分もかなわないと思う、本当のヒーロー。

そして、トーコが自分たちを守るようになったきっかけの人。

トーコの初恋の人。

もうどこにもいない人に、タケルは想いを馳せた。

余談ではあるが、タケルが憤ったまま家に帰り着いた時、脚の痺れたトーコとそれをつつこうとする兄が楽しそうにじゃれ合っていたため、キレたタケルにより、お説教延長戦が発生した。

終了して家に戻るトーコはよろよろと憔悴していたという。

9 ・ 普通の定義（後書き）

7 / 1 1 調整、改訂しました

翌日。

周囲の反応は実にぎこちなかった。

「お、おはよう！ トーコさん」

「おはようございます」

「おはようトーコちゃん」

笑顔が強張ってますよ。

あと、昨日まで呼び捨てだった男子がなぜにさんづけ？
何故に敬語になったし。

心の中で一通り突っ込み終えてから、笑う。

「うん、おはよー」

そんなにびびられるほどのことをやったのだろうか？

「やったと思うよ？ トーコちゃん」

ふむと、思案顔になったトーコの横で、苦笑。

振りかえるとチカの姿があった。

「おはよう、チカ」

「おはよ、トーコちゃん」

「なんで私が考えてることがわかったの？」

「小学校の時と同じ顔してたから、かな。あの時は声に出して言っ
てたし」

「そうだったっけ？」

「うん」

「まあ、同小の人間からすれば、この展開はさもありなんだけどな
更にその横から話に加わってきたのはマモル。

この学年では3割程度が同じ小学校の人間だ。

当時のトーコを知っている彼らからすると、いつこうなるかと予

想されるレベルだったらしい。

「わかってて距離を置くあたり、マモも腹黒いよね」

「お褒めにあずかり光栄！」

「褒めてなあい」

ぐつと拳を握って嬉しそうなマモルに脱力する。

その横でチカはのほほんと笑い続けている。

実はトーコの友達はいくつかない。

一緒にご飯を食べたり、課題のチームを組んだりする仲間はいくつか、親友と言えるほど心を許せる相手もいなければ、友達だと断言できる相手は数名。

高校にあがって数カ月だから、ということではなく、女友達特有の仲間意識になじめないことが原因だ。

特に思春期に突入した女子のベタベタ感は特に苦手で、恋愛がからむと厄介事に発展すること必至。

理由としてはかなりの確率でヤマトに惚れてしまうからである。

極端少ない、目の利く女子はタケルに心惹かれることもあるのだが、いかんせん、ヤマトとは釣り合わないけど、タケルなら、という比較下での選択であることが気になり、間を取り持つことはなかった。

トーコと仲良くなり、家にも遊びに行ければ、お隣はヤマト宅。そんな思惑での友人など歓迎できるはずもなく、現在のトーコの友人と云えば、恋愛に興味のない数名と、同小からはこののんびり娘チカ、悪友マモルくらいのもんだ。

それゆえ、トーコはよくわかっていた。

友人と云うのが、いかに大切なものかを。

恋愛の為には友人を切り捨てられる。そんなロマンスをうっとりとする輩がいかに薄っぺらいかを。

「たいがい飽きてるんだけどね、ヤマト兄の取り巻き関係で」

ぼそりと呟いた言葉は低く、それにびくりとマモルとチカが震えたが、それ以上を言葉にすることはなく、肩をすくめる。

そんな三人の背後で教室のドアが開かれる音がした。なんの気なしに振り返って、ドアの方を見たトーコの目に映ったのは。

「つつー！」

声にならない悲鳴をあげて、びくつと震えるミナコの姿があった。「……………」

「新たなトラウマの被害者……………」

「なんか、懐かしい光景だよね……………あはは」

乾いた声で笑う二人の脳裏をよぎっているのは、半べそで飛びのいていた悪ガキ連中の姿があるのだろう。

ちなみに彼らは未だにトーコを見ると直立不動になる。

まったく失礼な話だ。

肉体的には、乱暴どころか指一本触れていないというのに。

そのトーコの思考を言葉として聞いていたら、当時その場にいた全員が、その方がずっとマシだと言ったのだろうが。

「ちよつと入口を塞がないでって……………どうした？」

そんなミナコの後ろにいたらしいリツカが苦情を言いかけ、ミナコの状態に気付いた。

ぐいっとミナコの肩を掴んで体をずらさせ、自分の半身を中にいれ。

ばつちりとトーコと目が合う。

「あ……………」

状況を悟ったらしい彼女が気まずげな顔になった時。

ミナコが震える手でリツカの背に隠れ、ぎゅつと服の裾を握った。「えつ……………っ!?」

驚いて背後を肩越しに振り向くが、その視線すら気にする余裕はないらしいミナコに唾然とする。

あの傲慢で人を見下しているかのような態度だったミナコが。

自分に助けを求めている。

そうして見下ろした姿はいつもの小憎たらしい姿違い、保護本能をくすぐられた。

リツカにとつては恋敵だ。

いつだって偉そうにふんぞり返って、こちらを挑発してくる。だけど。

『同じ人を好きになった少女』

言いかえれば、戦友とも好敵手とも言えるかもしれない。そんな相手がおびえて、助けを求めている。

元よりリツカは正義感が強い少女だ。

剣道の道場に入ったのも、近所で起きた通り魔事件の話を聞いて怯える弟妹を守る為だったのだ。

今の彼女にとつて、ミナコはライバルで、有る意味、同志。

そして、トーコは

敵。

「まだ、何かあるの!？」

ぐいっとミナコを自分の背中に庇って、きつい目でトーコを睨む。その視線を受けて、トーコはひとつ目を瞬いた。

「……わあ。そうだったかー……」

ぼそりと小さく呟いた声は近くにいたチカとマモルだけにしか聞こえなかった。

「何よ？」

「ううん、別に？ 何も言っていないよ。今日は」

一瞬の思案を終えたトーコがいつものように笑う。

そして、ふっと昨日のような凶悪な笑顔に変わる。

下がった目じりも、上がった口角も変わらないのに、目だけが笑っていない笑顔。

「まあ、これからどうなるかはそちら次第だけどね？」
一瞬で、気温が下がった。

リツカの背でミナコがびくりと震えるのが分かった。
そんなミナコの手をぎゅっと握る。

力強く、励ますように。

それによろやくミナコが少し元気を取り戻した。

「も、もう、タケルに迷惑をかけるようなことはしませんわ！」

「そう？　じゃあ、期待してるね」

「……っ！　行こう！」

必死に言ったミナコに言葉と裏腹に、期待してないという表情で答えるトーコに怒りを誘われたらしいリツカがぎゅっと唇を噛んで、ミナコの手を引き、席まで誘導する。

その際、トーコの視界から庇うようにするのも忘れない。

だが、ちらちらとトーコを気にする二人に興味を失ったように、トーコ自身は自分の席について視線を向けずらしなかった。

ミナコとリツカの席からはトーコの背中しか見えない。

「……大丈夫？」

トーコの背中をにらみながら、ミナコをいたわると、ミナコはちよつと苦笑した。

「だ、大丈夫ですね。これくらい……あなたに助けてもらわなくても、平気でしたもの」

いつもの憎まれ口。だけど表情はいつもと違う柔らかさがあった。

「……はあ……。この意地っ張り！」

あんなに怯えてたくせに、と呆れるリツカに笑う。

「でもまあ……その……」

そして、目を泳がせてから、俯く。

「何？」

「だからあの……ありがと」

耳まで真っ赤にしてのお礼に、リツカは目を見張ってから、くすぐったげに笑う。

「どづいたしまして」

「トーコちゃん……」

「ん？ 何、チカ」

「こそつと声をひそめてトーコに話しかける。」

「どうしてそうかなあ……」

呆れたように溜息をついて、満足げに笑ってる上機嫌なトーコにぼやく。

「ま、悪くない展開だし、もうちょっとだけ悪役モード続行するだけだよ。大丈夫大丈夫」

「また、怒られるよ？」

「うぐ……内密にお願いします」

「むーりー」

「断る」

「え〜……つて、ん？」

両手を合わせてお願いポーズのトーコに二人がふるふると首を振って、胸元でバツを作った。

それに、気付いたことがある。

「なんで怒られたこと知ってるの？」

「あー。それはね」

「うん私たちがカナメ先輩の情報ソースだから」

「すなわち、ヤマト親衛隊の協力者。いわゆる情報屋ってヤツ？」

「……え、いつから？」

「中2くらいから？」

「うん、それくらいだね」

「……じゃ、今まで色々と筒抜けだったのは？」

「イエーイー！」

嬉しそうにピースサインをする二人を前にかたんと音を立てて立ちあがる。

そして、二人を前につこりと笑う。

「とりあえずさ、ゲンコか、でこぴんか、しっぺか選ばせてあげる」

「ちよ!?!」

「うそおっ!?!」

数分後、涙目で額を押さえるチカと、手首をこすりながら悶絶するマモルの姿があったとかなかったとか。

10・ 変化の兆し（後書き）

- 7 / 8 改訂&ラスト4行ミスで載せてなかったなので追加しました。
- 7 / 1 1 調整、改訂しました。

11 . いびつな少女

熱い。

熱いあついあついあついあつい。けむたい、めがいたい、のども
いたい。

こわい、こわいよ。こわい。

あつい、こわい。

たすけて

頭の中がそんな内容で一杯だった

どうしてここにいるのかとか、どうしてこうなったかだなんて、

考える余裕も、知恵もなかった。

顔も手も煤で黒く汚れ、さらにその汚れを広げるように涙があふ
れた。

ふくふくの柔らかい、小さな小さなてのひら。

お出かけ用のワンピースも汚れ、膝小僧には転んでできた擦り傷
視界一面に広がるのは地獄さながらの風景。

沢山の物が燃えていた。

シヨッピングセンターで起きた、悪夢のような火災。

その現場の真っただ中に、少女はいた。

まだ5歳になったばかりの少女、トーコは、半狂乱になって逃げ
出した群衆に弾かれ、たった一人逃げ遅れてしまったのだ。

こわいこわいこわい。

おとうさん、おかあさん、やまとにいちゃん、たける。

こわいよ、あつい、たすけて。

「た、すけ……」

熱は容赦なく体力を奪い、もう声もかすれて動けない。

この年齢の少女にはおよそ似つかわしくない感情が胸を支配する。それは絶望。

「しにたく、ない、よう」

かすれた声でそう呟く。

ああ、ああ。

だれかつー！

声にならない声で叫びながら、うずくまったトーコ。

その耳に、ガシャンっ！！ と何かが崩れ落ちる音が響いた。

なんだろう……。

重たい動きでそちらを見ようとした瞬間、かけられた声。

「いたっ！！！！ 大丈夫か！！」

その声の主は、ガラス窓をたたき割って、躊躇いなくこちらに駆けてくる。

年の頃は15歳くらいというところか。

何度か会ったことがある。

もう動けないトーコを腕に抱えあげ、自分の着ていたジャンパーの内側に包み込む。

「さ、く……」

「ああいい、喋んなくて！ 大丈夫。絶対助ける。助けるから」

「……………うん」

ずびつと鼻をすすって返事をした。そして力の入らない手でそれでもしつかりとしがみつく。

「遅くなって悪かった。もう大丈夫だからな。ちゃんと、みんなのところに連れて帰ってやるから！」

「うん」

そんなトーコをぎゅっと抱きしめた少年が顔をあげ、親の仇を見るように火の壁を睨む。

そして、それを突き破る為に駆けだした。

ヒーローだ。
せいぎのヒーロー。

ひやりと冷たい風が頬をなでた瞬間にそう思った。

駆け寄ってくる両親の腕に抱かれてそう思う。

彼に、たどたどしく、痛む喉を行使してでも伝えたいこと。

「あり、が、とう」

震える声で言ったトーコを優しく見つめる少年の、にかっと笑った笑顔に心が震えた。

その意味なんて知らない。

そこからどんな感情が育つかなんて知らない。

でも、それは確かに、何かの始まりだった。

「トーコちゃん、気付いちやっただかな？」

「まあ、たぶんな。トーコちゃんはどっかのバカみたいに鈍感じゃないし」

隠語でいうところのお花を摘みにトーコが席をはずした隙に、チ力はこっそりとマモルに囁いた。

「……………まずかったかなあ」

「……………」

不安げに顔を曇らせるチ力に難しい顔になる。

「でもさ、ずっとは隠しておけないしさ。もう、あれから3年にもなるんだぜ」

「そっだよね」

二人が情報提供を引き受けたのには理由があった。

思い出すあの時。

まだ中学2年になって数カ月のこと。

3年前、ヤマトが直接頭を下げに来た。

『オレだとトーコに十分目を配ることができない。だからどうか』
おねがいします、と年下の自分たちに頭を下げたあの姿を二人は
忘れられない。

トーコには初恋の人がいた。

5歳の時、火災で死にかけたのを助けてくれたヤマト、タケルの
母方の叔父。

二人の母とは10才年の離れた彼は、トーコ5歳の時、15歳。

トーコはそれから7年間、一途な想いを彼だけに捧げていた。

早く大人になりたくて、彼に相応しくなりたくて、普通の子供と
は違う成長速度で心を育てた。

そのせいか、他の少女らとは一線を画する早熟な考え方や、大人
な態度は同年代の男子をときめかせていたりもする。

それに思う存分はまっていた代表がマモルでもあるのだが。

容姿は特に飛びぬけているわけではない。

だが、浮かべる表情は綺麗だった。

今思えば、『近所のおねえさん』にどぎまぎする小学校男子、と
いう図柄を同年でつくりあげていたような感じだ。

駆け足で大人になろうとしていたトーコ。

そんな彼女が『壊れた』のが、3年前だ。

その叔父の訃報がトーコを壊したのだ。

当時彼は仕事にアメリカにいて、事件に巻き込まれた。

列車爆発事件。

テロだった、らしい。

詳しいことを二人は知らない。

遺体は見つかっていないが、絶望的。その報告に、彼の家族は『
そんなはずはない』『死んでいるはずがない』と葬式をあげること
を拒否した。

そして、トーコは、放心状態のようになって、何も食べず部屋に閉じこもった。

しばらくしていつも通り通学してくるようになったが、その時にはもう、何かが違っていたのだ。

いつもどこか遠くを見ているような存在感の薄さ。

そして、今まであり得ない速度で大人になろうとしていた成長がぴたりと止まった。

それでも周囲の少女よりは大人っぽかったのだけど。

彼女が強く感情を動かすのは、その感情のまま行動に移すのは隣の三兄弟のためだけ。

自分のことにはかまわない。

「心配だったんだもの」

「うん」

『心配なんだ。トーコが』

そうヤマトが言った。

『僕達を守ることだけを支えにしているようで、危なっかしいんだ』
「彼らがいなくなったら、本当にどうかしてしまいそうだったんだもの」

目を伏せる。

トーコは友達だ。

大切な友達。

チカにとつても、マモルにとつても。

だから受けた。

情報を提供するだけでなく、情報をまわしてもらえる約束で。

『君達なら、俺に伝手ができるならとか、そういう理由じゃなく、トーコのことを見ていてくれるだろう？』

そう言ってくれたヤマトの信頼にこたえて。

二人は彼女の近くにいた。

『三年くらい前から』

そう言った二人に、もうトーコも気づいているだろう。

だから、お仕置きと違って、てこぴんとしっぺをお見舞いした後は、ちよつと照れくさそうに笑った。

二人が何も言わないなら、トーコも言わない。

「やっぱトーコちゃん、可愛いよなあ……。俺だんぜん、トーコちゃん派」

「トーコちゃんに派閥はないと思うけど？」

「いや、これがね。静かな人気。さばさばしてそうで、でも大切にしてくれそうで……。なんてーの？ 顔のいい男をご近所さんに持ちながらもなびかない、容姿に左右されないってところもポイント高し！」

ぐつと拳を握って力説するマモルに、チカが苦笑する。

「わからないでもないんだけど、」

「容姿で頭に血が上る系じゃなくてさ、人格を知って初めて好きになるっていの？ 本命が多いんだよね、ま、俺はそういうのは諦めてるんだけどさ」

テンションがあがったらしいマモルがお構いなしに喋るのを聞いて、チカが苦笑のまま口を閉ざす。

そして、口に出そうと思っていたことを心のなかで呟いた。

（さばさばしてて、でも包容力ありそうで、ってまるで男の子褒めてるみたい。まあ、ヘタレ男子よりトーコちゃんの方がかっこいい時あるけどね。マモルやタケルくんよりはずっと）

チカが苦笑したままそんなことを想っているとも知らず、マモルのトーコ賛美はトーコが戻ってくるまで続いていた。

11. いびつな少女(後書き)

7/11 調整、改訂しました。

「……うん、できない」

途方に暮れたようなそのセリフは、トーコのものだった。夜の自室で正面を見つめ、がっくりと肩を落とす。

「どうしようかな……」

手にしていたものをぎゅっと握りしめる。何度挑戦しても越えられない壁があった。

その先へと行きたいのに、願ってもかなわない。

できない自分に苛立っていられたのは最初のうちだけ。

どんどん、絶望感と無力感が増してきて、腕を上げる気力すらなくなってきた。

(この程度のところでもつまずくわけにはいかないのに)

歯噛みして、ソレを睨みつけるも、心のどこかで、仕方ないという諦観もある。

これが一人の限界なのだろうか？

「仕方、ないか」

ふうと吐息をついて、手にしていたものを足元に置く。

向かう先は、部屋の窓。

カーテンが閉められていたそれを軽い音とともに開き、前を見る。そこにあるのはタケルの部屋の窓。

そちらはカーテンが閉められておらず、ロフトの床に寝転がり雑誌を開くタケルの姿があった。

窓の傍に置いてあったモノサシを手にし、その窓をこんこんとノック。

このモノサシはこうしてタケルに呼び掛けるために、わざわざ窓の傍に常備されているものだ。

その物音に気付いたタケルは顔をあげて、小首を傾げた。

トーコが真剣な表情で自分を見ていたからだ。

「どうした？」

起き上がり、窓まで歩み寄ると、カラカラと音を立てて窓を開ける。

「つられたように表情を改めてそう問いかける。

「タケル……」

そんなタケルにちよつと困ったような表情を作り、呼び掛ける。

「ちよつと、頼みがあるんだけど。いい？」

「頼み？」

「うん」

「まあ、俺でできることなら、なんでも」

珍しい様子に即答する。

何かあったのか、内心で考えてみるが、何も思いつかなかったの
で、トーコの返答を待つ。

「じゃあ、ちよつと時間をちようだい？ それから」

返答にほつとしたように笑って、トーコは室内に取って返した。

そして、しばらくこそこそと荷物を纏めるとそれを腕に抱えて窓
に向かう。

「コレ、受け取って」

「……………」

「で、手伝って欲しいの」

「……………何事かと思えば」

声が乾いたものになる。

真剣に頼みごとを聞こうとしていた自分が馬鹿みたいに思えて、
表情が呆れたものになるのを止められない。

そんなタケルにトーコはにっこりと笑ってみせると。

「んじゃ、おじゃましまーす」

「お前、またここから来るのか」

「今さら今さら！」

慣れた様子で窓枠を乗り越えた。

「あ！ タケル、ノコノコきた！ ノコノコ！」

「ちよ！？ お前、俺を盾にすんな！」

「あははは」

「鬼か、コラ！ あ、フラワー出た」

「いただきいいい！」

「ざけんなああ！」

数分後。

二人仲良くTV画面に向かい、Wiiriモコンを振る二人の姿があつた。

「いきなり何を言い出すかと思つたらさあ……」

「いや、そう言うけどさ。タケルは気分的に二カ月以上ぶりかもしれないけど、私的にマリオ二人プレイは二週間ぶりくらいよ？」

「……………そういうやそうだったけ？」

「うん。ここまでも一緒にクリアしてきたじゃん」

言われて思い返してみるとその通り。

自宅に友達を呼ぶというのがお互いにあまりない二人だ。

このテの皆でわいわいやるゲームに関しては二人でやることも多い。

後は、妹のミコトが合流することもあるし、時間的な余裕があれば、ヤマトも参加する。

「久しぶりの割に上手いよね」

「トーコは基本アクション苦手だよな」

「……………煩い。ルイージのくせに」

「いや操作キヤラはマリオだから！ ルイージ馬鹿にすんな！ 弟キヤラ馬鹿にすんな！」

「……………ごめん」

「……………だからってマジに謝らないでくれる？」

「んー……アクションゲーム、好きは好きなんだけどね」

「……当たり前のように元の話題に戻るし」

「じゃれあいながら画面に向かい、キャラクターを操作する。」

「そういえばさ」

「ん？」

視線を画面に固定し、割と真剣に操作しているタケルをちらりと横目で見る。

聞き忘れていたことを思い出したのだ。

(うん、いい機会かもしれない)

「タケルさ、本命のゴって異世界に残してきたりしてる？」

「ぶっ！」

吹き出して、トーコの方を見る。その手から、Wiiriモコンがすり抜けた。

ストラップのおかげで床にまで落ちはしなかったものの。

「あ。死んだ」

ゴールは目の前だったのに、マリオは奈落に落ちて行った。

完璧に硬直しているタケルを尻目に、悠々ゴールしてから、タケルを見る。

「……………」

二の句が継げないようすのタケルを前に、勝ち誇ったように笑う。

「アタリだ」

「つつー！」

首まで赤いタケルには、なんの言い訳も否定もできない。

「な、なんで、お前……え。だから、それ、は」

「うんうん。ちょっとマリオやめよつか。ゲームができるような精神状態じゃなくなっちゃったみたいだし」

しどろもどろに口を開くタケルに理解者の笑みで頷いて、手際良くゲームを片づけ始める。

「い、いや。確かにゲームとかって気分じゃないけど、でもなんで分かったのか。」

そう聞きたいのは言葉にする必要もなく、トーコに伝わる。

「ま、とりあえず、お話ししようか」

「うぐ……………」

「相談、乗ってあげるよ？」

片付け終わったWiiを足元にまとめて、立ち尽くしたままのタケルを上目づかい。

「……………」

「ん？」

「……………オネガイシマス」

そういうわけで、夜のゲーム大会は一転、トーコちゃんなんでも相談室と化すこととなった。

12・ 割とお見通しです(後書き)

紛らわしいトリーコちゃんです。

実は著者はWiiを持っていなかったりする落とし穴。

13 ・ 好きになったひと

「彼女の名前は、エリシア」

「恥ずかしそうに顔を赤らめ、目線はそらしたまま、タケルは話し始めた。」

「俺が行った世界の、俺を召喚した国の王女だよ」

「王女ってことは……お姫様か！」

「……うん。まあ、そうなるな」

「うわー……王道だー」

「テンプレ通りの交友関係に乾いた声が零れる。」

「仕方ないだろ。国を賭けての勇者召喚だ。呼び出した勇者を粗雑に扱うわけにもいかなかったみたいだし」

「そのセリフで、相当切羽詰まった状態だったのだと知れる。呼び出した勇者が気を悪くして、助けられなかったらおしまいだったのかもしれない。」

「国家の方針として勇者を呼び出すってことなら、王族が対応するのわかるか……うん、それで？」

「俺の役目は魔王軍の撃退と、もう一つ。魔王軍がやってくる為に作られたゲートを壊すこと」

「魔王と戦ったんだ？」

「いや。撃退しただけ。んでもってゲートを破壊しただけ」

「え？ そんだけ？」

「意外な返答に拍子抜けしたような気分になる。直後、はっとして「あ、そんだけってことはないか。それでも命がけだったんでしょっ？」

「そうだな。何度か死ぬかと思ったよ」

「さりと告げられた言葉に、思い切り顔をしかめてしまう。」

「……ぷっ……トーコ凄い顔になってる」

「笑いごとじゃないよ」

「悪い悪い……」

タケルの中では、命をかけさせられたことは、とっくに受け入れられた事項なのだろう。

それでも、トーコは苛立ちを押さえきれない。

(だって、タケルが死ぬかもしれなかった)

自分の知らない内に。

自分の知らないところで。

それが受け入れられるはずはない。

「うん、トーコは多分、怒ると思った。だから本当は……トーコにだけはバレたくなかったなあ」

苦笑したのはタケル。

トーコの内心など分かり切っているのだろう。

トーコがタケルのことをお見通しだったように、タケルとてトーコの反応くらい読めるのだ。

「そこは自分のタイミングの良さを呪ってよ。えっち」

「えっ!? 待て! あれは不可抗力……」

「はいはい、で続き続き」

「……お前が脱線させてるんだろうが」

緊張感皆無なトーコに脱力しながら、話を戻す。

「色々長くなるけど、もうこの際だ。向こうであったこと、ある程度話すよ」

「うん」

そうしてタケルが語った内容は以下のことだった。

タケルがいつも通り学校から帰っている最中にいきなり光に包まれて、気が付いたらローマにあるような神殿の中にいたのだという。足元には淡く光る魔方陣。

状況が分からずに茫然とするタケルの前で、周囲にいた神官が全

員ひれ伏した。

タケルは、日本で言うところの総土下座状態にドン引きになったらしい。

まあ、当然だろう。確かにそれは引く。

ひきつった顔で周囲を見回していた時、一人の人物が前に進み出てきた。

真っ白な神官服を着た金髪の少女。

彼女がエリシアだった。

彼女は王女であるだけでなく、魔法の素質が強く魔術師としても優秀だった。

勇者召喚の儀式の中心となったのも彼女らしい。

彼女にここがどこか問いかけたタケルに異世界であることを告げた彼女はその場に片膝をついて顔を伏せ、言った。

『よつこそご降臨下さいました。どうか我らを御救いください。勇者さま』

と。

彼女は、否、彼女の国は空前絶後の危機にあった。

王都の南にある森から魔物が溢れ出したのだ。

他国との国境線でもある山脈は、古来より魔物がくる異界のゲートがある場所として忌むべき禁足地とされている。

とはいえ、その山の中に入りさえしなければ、大きな被害はない。

その筈だった。

大規模な魔物の集団が周囲にあった街を滅ぼすまで。

悪夢のような出来事から一転。

魔物たちは一斉に周囲に散開した。

他国との連携は取れなかった。

隣接する他国全てにその襲撃は行われていたから。

他国にまで手を貸す余裕はなかった。

彼女の国にあった常駐戦力は他国に劣り、その代わり魔法技術と神聖魔術に優れていた。

神聖魔術というのは、神の力を借りて行う奇跡だという。

神が降臨したもうた地と言われていた彼女の国には、多くの古文書や古代の神聖武器と云うものが残されていた。

だが、それらの武器のほとんどが、現在は使えるものがないというのが現状。

古文書で同じような事態がなかったか、又、それをどう治めたかを探しながら、一進一退の攻防線を繰り広げることが彼女らにできる限界だった。

「そして、エリシア達はその古文書の中から『魔王』の存在を発見したんだ」

「それと、それを撃退した『勇者』も、かな？」

「うん」

本来、魔物は連帯感情をもたない。それ故、バラバラに暴走するかのように散発的な攻撃しかできない筈の生物だ。

そんな彼らが一つの意思の元、連携する。

そこには指揮官であり、また指導者である意思が働いている。

その存在こそが『魔王』。

「とはいえ、魔王って人物自体は、これまではっきり確認されたわけじゃないらしい」

「そうなの？」

「うん。前回の時も魔物が発生するゲートを聖剣で封印することで事態は終結したんだって」

そのことから、魔王はゲートの向こうに存在し、ゲートが緩む時を虎視眈々と狙っているとされている。

「聖剣って……」

ちらりとタケルの部屋の隅に立てかけられた棒状ものを見る。

嚴重に布に包まれているが、多分あれが。

「そう、ソレ」

異世界から帰ってきたその日、初めてみた剣。

それは、トーコでは持ち上げることかなわない程に重たく、しかしタケルには軽々と持ち上げることができたもの。

装飾は最小限なれど、柄頭の銀細工と、濃紺の紋章は重厚だ。

「神聖武器で、俺しか使いこなせないって話したよな」

「うん」

「あちらの世界にはそれぞれの人間に属性つてのがあるらしい。神聖武器を使える属性がいなかったんだって。それで俺が数少ないその一人」

「神聖武器とか言ってたから、光とか聖とかさういう？」

「光だって。俺が光属性とかちよっと笑っちゃったけど」

「……そんなことないけど、まあそれはいいや。で？」

自嘲的なところは昔からわかっているのでスルーしてとりあえず話を進める。

「え、うん。とりあえずその剣を持ってって、ゲートを封印してほしいってのが向こうのお願いだったんだ。と、なると当然周囲にはモンスターがたむろしている」

「そこをつつきって封印ですか」

「そう。最初の一月で剣に慣れるために訓練して、二月目に入ったところから実戦。二ヶ月目の二週目くらいに出発して三週目に封印。後はこつちに帰る為の準備をして、それから帰還」

「ハードスケジュールだね」

「まあな。でも仲間もできたし」

「彼女とも出会ったし？」

「か！？ カノジョじゃない、けどな」

「いやさういう意味の彼女じゃなく、普通にそのお姫さまのことを言っただけだ」

「え！ あ、そうか。ごめ」

「ういういしいー」。タケルとコイバナとか、この状況、笑え

るわ。あはは」

「あははじゃない！ ああもっつ！」

「ごめんごめん」

口を押さえて笑いを押さえているトーコに、真っ赤な顔で抗議するタケル。

そのタケルを見ながら、トーコが目元を和らがせた。

「そのコ、いいコ？」

細めた目で慈しむように。

からかうような笑いを治めたトーコの微笑にタケルは目線を合わせる。

相変わらず照れくさそうに頬を染めたまま、それでも真っ直ぐに見て。

「うん。それだけは確実に言える」

彼女のことを思い出し、自身を僅かに微笑んで。

「天然でちよつと抜けてるトコもあるけど、優しくて、一生懸命で、ちよつと意地っ張り。立場からしたらさ、もっと周囲から持ち上げられて偉ぶっててもおかしくないのに、素直でちよつと強かな子だよ」

「……………そっか」

よかった、と小さく呟いて頷いたトーコの様子に気づく。

「……………あー…。もしかして、心配、してた？」

「まあね。アノ三人に対する態度に恋愛感情を感じなかったからさ。ヤマト兄の周囲を見て、そういうの苦手になってるのかなとか、色々」

「なんか、時々トーコって母親みたいだよな」

「っ！？ せ、せめてお姉ちゃんくらいにしてくんない？」

苦笑気味のタケルの言葉に愕然とする。

（やばい。微妙に否定できないかもしんな……………いやいやいや、なんぼなんでもそれは）

自分が、タケルを始め、お隣の三人に異常に甘いことくらい自覚

している。

しかし、母親はいくらなんでも……でも、それくらいやり過ぎて
る？ え？ 私、母親レベルで過保護？ と葛藤を始めたトーコを
笑う。

「いいんじゃない？ 別に。だって俺達もトーコに甘いんだからさ、
特にヤマト兄」

あれは父親のレベルすら超えている、と遠い目で呟いたタケルに、
目を瞬いて彼の人物の行動、言動を思い出す。

当たり前のように膝にだっこしてみたり、必要以上に過保護だっ
たり。うん。

「それもそっか」

「……………ヤマト兄のあの猫っ可愛がりはさ、もう溺愛だから」

「うーん……………否定できない。……………まあ、いいけど」

男女の感情がない分、照れもなくされるがままな様だが、正直ち
よっとどうかと思う。

兄のファンにばれたら洒落にならない。

そのことに薄々気づいていながらも、やはり改善する気がなさそ
うなトーコに、タケルはため息を零した。

「でさ」

「うん？」

「向こうの世界にはもう行けないの？」

「いや、それが」

タケルの様子から、もう行けないということはないだろうと思いつつも、一応聞いてみたトーコに、タケルは表情を曇らせた。

(え？ まさか)

今、嬉しそうに語った少女と、もう会えないなんてことが、一瞬考えたトーコだったが、タケルはすぐに否定した。

「行けないことはない。状況さえ整えば、行くことは可能だ」

「けど、と続けたタケルは、申し訳なさそうに目を伏せていた。

「俺はさ、知らなかったんだよ。簡単とはいかなくても、割とすんなり呼び出して、すんなり帰せるんだと思ってた。だから、騒ぎになると困るから元の時間に戻りたい。そう言ったんだ」

二ヶ月のタイムラグをゼロに。

確かにそうでなければ、今頃警察を始めとした搜索願が発生しただろうし、下手をすれば報道沙汰。

タケルの素行が悪ければ、いつものことということになったかもしれないが、いたって普通の男子高校生の日常を過ごし、外泊すら滅多にしないタケルの行方が分からなくなれば、大事になっただろう。

かくいうトーコも。

「冷静に待てる自信、ないなあ……」

思わず呟く。

冷静に、どころか。

(正気でいられるか、どうかも)

胸の奥に真つ暗な闇がある。

大切に大切に、幸せな記憶。

あの人が唐突に消え去った時、沈み込んでしまい、自力では抜け出せなかった深い闇。

自分の心にこんな闇があるなんて知らなかった。

知らずに、いたかった。

(更に、タケルも、なんて)

無理だ。絶対に。

考えただけで、血の気が引いていくような気がする。

足元が暗くなるような、心の奥底を凍らせる恐怖。

そんなトーコの額をぺちちと叩く手があった。

タケルだ。

「俺は、ここにいるだろ」

「……………うん」

真剣な目に、自分がこうなることがばれていたと感じる。

これも、タイムラグをゼロにしたかった理由の一つなのだろう。

「ごめん」

「いや。それで初めて知ったんだけど、空間を超えるだけでも大変なコトで、時間を縮めるとなると更に難しかったらしい」

神聖魔法とか異界への干渉とか、難しい話を聞いて、諦めるしかないかとも思った。

「だけどさ。英雄だからって」

「……………」

「勇者の願いだから、って」

無理をしても、叶えてみせると、力強く笑った。

術式を組む筆頭に立ったのは他でもない彼女。そして、共に過ごした仲間達。

その下に数名の有能な魔術師たちが必死で取り組んでくれた。

「結果、俺はこうして帰ってこれた。だけど、俺がずらしてもらった二ヶ月の間は、向こうから干渉できなくなっただ」

「二ヶ月だけ？」

「うん。だから、二ヶ月たったら、向こうから何かしらアクションがあるとおもっ」

「……………そっか」

「うん」

「いい仲間に会えたんだね」

「ああ」

嬉しそうに、どこか誇らしげに笑う。

こちらの友達も大切だ。

だけど、生死を共にした彼らもまた、大切な存在。

出会えた運命に感謝するくらい。

「だからさ、後悔はしてないんだ。命をかけたこと。きつかったし、死ぬかと何度も思ったし、大変だったけど。下手したら、家族やトーコを苦しめてしまったかもしれないけど、それでも」

トーコの知る、兄の存在に隠れるようにしていたタケルではなく、帰ってきてから見せた頼もしい笑み。

「後悔は、していない」

「……………そっか」

もう一度、そう答える。できるだけあっさりと言こえるように。少しさみしいなんて思わない。思わないようにする。

タケルは歩き出した。停滞の時期を終えて。

あの日から進めない自分をおいて、進みだす。

言葉にならない焦りがじわりと這い上ってきた。

(だめ。これはきづかれてはいけない)

ようやく進みだした彼の足かせになってはいけない。
その思いから、必死に内心を押し隠す。

「じゃあさ、」

その様子を見抜かれないうちに次の話題をタケルの前に広げる。

「他の家族にはこのこと、話さないの？」

「う……………」

痛いところを突かれた、という顔になるタケル。

分かっている。

向こうからのアクションで、ばれる可能性があることを。

今度こそ騒ぎになる確率が高いだろう。その為には家族に話して

おいた方がいいのも事実。

「ヤマト兄も、心配してたよ」

「ヤマト兄……………」

その名前にタケルの表情が曇った。

「叔母さんよりかは話しやすいと思うけどな」

「うん、わかってる。わかってるんだけど……………」

奥歯に何か挟まったような口調に、ぴんとくる。

「一番話したくない相手が、もしかしてヤマト兄？」

「……………」

「ばりばりと頭をかいて俯く。

「勇者って、さ」

「ぼつりと力ない声で。

「本当は俺じゃなくてヤマト兄だったんじゃないかって

「はあ？」

「なんでもできてカッコイイ自慢の兄。

「だけど、誰よりもコンプレックスを感じさせる人。」

「弟だから、聖剣を使えたとかそういうことで、本当は俺はスペアだったんじゃないかって思いが、抜けなくて、さ。はは、情けないなあ、もう」

自嘲して笑うタケルを見ていた浮かび上がったのは、怒り。

「……………」

「……………？ トーコ？」

唐突にすくつと立ち上がったトーコに、タケルが目を瞬く。

「ヤマト兄呼んでくる」

「え！？ はあ！？ 今っ？」

驚きの声を上げているタケルを無視して、部屋の扉を乱暴に開ける。

お隣の構造など全て承知の上、ヤマトの部屋は右隣の扉だ。

「ヤマト兄、ちょっといい？」

ノックをして部屋に呼び掛けると、すぐに反応があった。

「トーコ、来てたの？」

「うん」

「また窓から？」

「……………えへ」

「まったく、怪我しないでね。で、何？」

「ちよつと来て」

「……………？」

窓からの侵入を呆れたように窘めて、腕を引くトーコに素直についてくる。

「あ、や、ヤマト兄、ええと」

「……………タケル？」

何の説明をしないまま連れてこられた弟の部屋では、焦った顔で動揺しているタケルの姿。

その様子に首を傾げ、話を聞こうとしたが、トーコは。

「コレ、持ってみて」

タケルの部屋の隅にある布包みを指さした。

細長い棒状の何かが嚴重に包まれたもの。

そのトーコの妙な申し出にタケルの表情が強張った。

制止するわけではなく、ただ緊張の面持ちでこちらを見る弟に首を捻りながらもソレに手を伸ばす。

指先で触れて、握り込み。

「っ！？ 重っ！？」

とても持ち上げられない重さに驚愕する。

物質のサイズからして、例えそれが鉄や石でできていたとしてもあり得ない重さだ。

「タケル、トーコ、これは一体？」

驚いて振り返った先では、茫然と座る弟と腰に手を当てて怒ったようにタケルを見下ろすトーコの姿があった。

「ほんとに、持ちあがらない？」

「ああ。どうやってここまで持つてきたんだ？」

信じられなさそうに包みとタケルを見比べる。

部屋にあるということは二階にある部屋までどうにかして運んだということだ。

これが弟に持てるなどは到底思えない。

そんな表情の兄を前に、タケルは肩から力が抜け、呆けたような顔をしている。

「タケルはね」

そんなタケルの前で仁王立ちしているトーコは、びしっと指先を突き付ける。

「タケルはタケルを見くびりすぎ！ 私の幼馴染を馬鹿にしないで！」

憤然と云い放つ。

頭にきていた。

今の今まで誇り高い勇者の顔をしていたのに。

後悔していないと言っていたのに、兄という存在の前にその誇りすら揺らぐことが。

「うん、ごめん」

本気で怒るトーコに、タケルが素直に謝った。

ああくそ、と小さく呟いて、頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜる。

「すぐ卑屈になる。もう、ホントごめん」

帰ってきて、多くの人の好意と悪意を受けて、兄のようにできない自分に苛立っていた。

その感情は、タケルのなけなしの勇氣すら押し潰そうとする。

久しぶりに出ていた弱音の口癖。

今の不安。

言われていたのに。

「同じコトを、エリシア達からも言われたのに」

「同じコト？」

思い出して、ため息が零れる。

「向こうの世界でもずっとそうじゃないかと疑ってた。ある程度、ソレを使いこなせるようになってもまだずっと、ずっと思ってた。そのことを伝えた時」

自虐的で、沢山諦め続ける自分に慣れていた。

そんな状態で渡った異世界。

タケルが今の自信を手に入れるまで、相当な葛藤があったのは分かる。

拭えない不安があったことも。

「『私達の勇者を、貶めないで』って」

『タケルのお兄様がどんな人かは知らない。だけど、だけど、私達の勇者はタケル一人です！』

顔を真っ赤にして、憤って、怒った。

『他の誰でもない貴方が私達の勇者です。相手が誰であろうと、例え本人であろうと、私は私達の勇者を貶める者を許さないんですから！』

そう叫んだ。

そのことを思い出して自己嫌悪に陥るタケルにふうっとため息を零す。

「ばーか」

「うぐ……………」

「ばーかばーか、ヘタレ」

「……………ううう」

頭を抱えてへこむタケルを散々罵倒して。

「……………でもイイ子だね、エリシアさん」

「うん……………うん、そうなんだ」

ため息の後苦笑したトーコに、ようやく顔を上げたタケルがはにかんだ。

「うん、で、どついでのこと？」

その横で、兄は蚊帳の外のまま、困った顔をしていた。

タケルの話を聞いて、暫く難しい顔で黙り込んでいたヤマトが深いため息を零した。

「本気で、言ってるんだよな」

三人で輪になって座る中心には、タケルが軽々と運んで置いた聖剣がある。

ヤマトがどうやっても持ちあげられなかったそれを、なんの苦労もなく持ちあげて、布を解いてそこに広げてみせた。

本物の、生物を傷つけることができる武器である、大型の刃物。

タケルのような普通の高校生が到底手に入れることなどかなわなはずのものを見て、眉間に皺を寄せる。

「信じてやりたいのはやまやまなんだけどな……」

「うーむ、と腕組みをして言葉を失う。」

「うん、だよな。コッチが正しい反応だよなあ」

しみじみとそれを見て呟くタケルに、落胆の表情はない。

信じてもらえないことよりも、極真つ当なりアクションに満足そうに頷く。

「トーコはすぐに信じたの？」

「まあ、概ね」

「だって、タケルが私に嘘付けるはずないし」

つくならつくでもっとマシな内容考えるだろうし、と更に続ける。「今ナチュラルに嘘つくはずないし、じゃなくて、つけるはずないし、つつつたな、トーコ」

「んー？ 何か問題でも？」

「何その自信」

「ほぼ双子の自信？」

「ほぼ双子……確かに周囲の扱いは正にそれだったけど」

「やたらとちびの頃からワンセットにされた記憶が頭をよぎる。

両親多忙なタケルらがトーコ家に預けられたときもそうだし、逆にトーコがタケルの家に遊びに来てる時もそうだった。

同じ年とはいえ、普通にひとくくりで扱われていた記憶は色濃く脳裏に焼き付いている。

「じゃあ聞くけどあの時……いきなり発見された時、嘘つこうとか誤魔化そうとか考えた？」

「……………いや、ないな」

「でしょう？」

突拍子もない話だ。

信じてもらえないはずがない。

それでもあの瞬間。

嘘をつきたくなかったし、最初からそんなこと頭になかった。

「そつだよな、普通は信じないよなあ」

「そこはトーコなら信じてくれると思うたとか言いなさいよ」

「え。そういうものの？」

「うん、そういうもの」

神妙な顔で言うトーコにタケルは首を傾げて。

「じゃあ、トーコなら信じてくれると思って？」

「じゃあ、と、疑問形が余計。減点〜」

「厳しいなあ」

重々しく注意するトーコに苦笑。

そうやってじゃれあう弟と、妹同然の少女を前に、ヤマトは肩から力が抜けたようだ。

困ったような苦笑は、呆れているようにも見える。

「分かった。信じるよ」

「ヤマト兄!？」

苦笑交じりの声に驚いたのはタケル。

「え、本当に？」

「たった一人の弟の言うことだもんな」

悩んだ末の言葉で、まだどこかに信じがたいという思いがあるのが分かる。

それでも全部懐に入れる。

「ありがとう……」

「いいさ。っていうか、この聖剣？ とやらで戦ったって、お前最近剣の手合わせしてなかったのに」

「ああ、向こうで稽古つけられた。久々すぎてかなりハードだったけど、基礎はできてたし」

運動神経に関して、飛びぬけているとは言えないタケルだが、実は武道の嗜みはあった。

兄、ヤマトは剣道部に所属しているが、そもそも剣道に興味を持ったのは、二人の叔父に手ほどきされてからだ。

二人の叔父は武道全般をこなし、護身と弟妹、母らを守る為に、と二人に剣術体術の基礎を仕込んでくれた。

中でもヤマトは剣術で才を発揮し、通い始めた近所の剣道場でも一、二を争う強さになったのだ。

タケルも同様に剣に関して、兄ほどではないにしろ、才を現わした。

ただ、同じ剣道場に通うことを拒否し、結果、早朝の兄の鍛錬に加わったりする程度だった。

それもここ一年ほどはなくなっていた。

その為、送られた異世界では、なまっただ感覚を取り戻すのに随分と苦心したものだ。

「命もかかってたし。まあ、それなりに強くなったと思う」

「ふうん……じゃ、今度手合わせしよう」

「いいよ」

「あ、ハイハイ！ 私見学したいー。声かけて」

「オッケー」

ヤマトにちらりと浮んだ表情は闘争心。

(実は負けず嫌いで、戦いたがりだよ、ヤマト兄は)
武道家魂というか、強い相手と闘りあうのことに喜びを感じるタイプ。

周田からは冷静で穏やかで、暴力を好まないと思われているヤマトの本性を垣間見る。

「それと、二ヶ月後、だったか。何か俺に手伝えることがあったら言って」

「うん」

「流石ヤマト兄」

うんうんと、頷きながら言うトーコに、複雑そうに笑う。
すぐに信じてやるできなかったのに。

流石と言われることなんて、と思っているのだろう。

(そうじゃないんだよ、ヤマト兄)

ヤマトを見て、微笑む。

言葉を飲み込んだまま。

(そういうことじゃなくて)

トーコがいう流石とは、そういうことじゃないのだ。

信じられないなんて当たり前前のイレギュラー。

世間の兄姉、他の大人たちならば、何を馬鹿なと笑い飛ばすのだろう。

思想的には理性的なタイプであるヤマトが信じられないなんて当然なのだ。

だけど、それを軽く受け流すのではなく、真摯に聞いて、受け入れようと努力して。

納得できてない部分があっても、信じようと努力する。

兄だから。

弟だから。

呼吸するくらい普通にその苦勞も、悩みも手を貸そうとする。

(そこがすごいんだよ。ヤマト兄)
改めて言ったところで、何を当たり前のことをと言っただろうから言葉にはしない。

しかし、強固な信頼関係のある兄弟なんて世間にどれくらいいるだろうか？

兄や姉という人種は、基本的に弟妹は自分より劣るものとみる傾向にある中、対等に扱い、頭ごなしに否定しない。

本人が努力する部分は、もどかしくとも見守り、手の足りないところだけを手伝う。

それは、理想の関係で、又理想であるが故に構築が難しい関係だ。それ可能とする二人を誇らしく思う。

「さて、と。私は戻ろうかな」

「あ、うん。じゃあ、先に向こうに渡れよ。Wii受け渡すから」

「お願い」

「……………ホント、怪我しないでよ？」

よいしょ、と小さく呟きながら窓枠を乗り越える後ろ姿を見送って、窓越しにゲーム機のやり取りをする二人に頭を押さえる。

いくら言っても、この通路が封鎖される日はこないようだ。

「はいよ。じゃあ、おやすみ」

「うん、ありがと。おやすみ。ヤマト兄も」

「はいはい、おやすみ、トーコ」

笑顔でひらひらと手を振るトーコが窓とカーテンの向こうに消える。

それを確認して、タケルもまた自室側の窓とカーテンを閉めた。

「しかし……………」

ぼつりと呟かれた声はヤマトのもの。

「トーコは凄いな」

「うん。俺もそう思う」

感嘆すら籠った声と、嬉しそうな声。

兄弟達の偽らざる感想。

「なんで信じられるんだよ、って感じだよな」

「まあ、そうだね」

「でも…………… すごい嬉しかった」

「…………… そうか」

「うん。本当はさ、もっと時間をおいてから話すつもりだったんだ」
視線をカーテンに。

否、カーテンの向こうにあるトーコに向けたまま。

「『なんてなく』とか冗談めかしでも話して、様子を見てとかそういう感じで考えてたんだよ。だって信じるなんて思わないだろ」

「割と外堀埋めないと落ち着かないもんな。お前」

「どうせヘタレだよ」

深刻な表情のタケルに苦笑して頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「良かったな」

「…………… うん」

ちよつと乱暴な愛情表現と共に、温かい言葉が降ってきて。

確かな絆の結ばれた味方の存在。

それは、タケルの力となった。

17・歪んでいく恋心(前書き)

難産でした

17・歪んでいく恋心

「おはよう、ミナコ」

「今日は遅かったですわね、リツカ。朝練でしたの？」

「うん。それでさ、今日の数学の課題なんだけど」

「またですか？ もう、しかたありませんね」

朝から交わされる長閑な会話。

(どうして)

そんな二人を前に彼女は心の中で呟いた。

ついこないだまで敵対し、ギスギスしていたのに。

(どうしてなの?)

ぎゅっと唇を噛んでうつむく。

誰にも顔を見られないように。

自覚があったからだ。

自分がいつもの委員長じゃない、表情をしているであろうことが。

ミナコは上流階級の両親の元に生まれた。

高飛車で高慢で金を持たぬ者を見下す両親を見て、言い知れぬ嫌悪感を覚えるも、我が子すら自分のアクセサリーとしか思っていない親に失望されることを恐れて言い出せなかった。

容姿が整っていて、頭が良い、自慢できる娘じゃなければ許さない。

時として、叱咤はミナコの心を打ちのめした。

そんな両親の前に、反抗などできず、ただその状況に慣れようとしたのは、自分の心を守る為、必要なことだったのだろう。

友達すら選べず、常に孤独。

だからこそ、心まで両親と共にあろうとした。
高慢で高飛車な自分を作り上げることで、彼女は自分を守ろうとした。

そのことが更に自分を孤立させるのだとわかっていても。

リツカもまた学校では浮いた存在だった。

男勝りで、どんな男子よりも強い彼女だったが、心の中では可愛いものが好きな、至って普通の女の子だった。

しかし、周囲の男子は彼女を男女と呼び、からかい蔑み、女子は格好いいリツカさんには似合わないと言われた。

それはリツカにとってのトラウマであり、消せない疎外感だ。

女子の中に入らず、かといって男子の中に入ることもできない。

周囲が作り出す壁を壊すことができず、彼女も又心を許せる友人はいなかった。

どちらも同じだけ学校で浮いていて、どちらも同じだけ友人と云うものに飢えていた。

これがタケルが気付いてしまった彼女達の苦悩、そして孤独。

『普通』からの逸脱による疎外感。

タケルが突き放せなかった理由だ。

二人が親しくなれば、互いに友人ができていい方向に向かうかもしれない。

自分への過剰な干渉の裏側には、そうしなければ外界と接することば難しいからではないかと考えたのだ。

実のところ、タケルは彼女らの恋愛感情すら疑っていた。

彼女らがそのことを知れば、激怒するとは思ってもせずに。

当たり前だ。

自らの初恋を、思いを向けられている当の本人に否定されてショックを受けない女の子はいない。

この件に関しては、後日トーコによる教育的指導が入ることとなる。

ともあれ、二人はトーコという共通の敵を前に友と成った。ただスマレだけを置いて。

どうしてこうなのだろう？

委員長となり、そう呼ばれるようになって、もう数年が経つ。教師からは覚えが良く、他の生徒からも信頼を受けている。だけどもある時気付いた。

いつも、誰にでも平等な委員長。

委員長は皆のまとめ役。

だから、何かあった時は頼るけど、普段は誰にも肩入れしない。

そう思われていることに。

結論から言うと、友達云々より以前に、委員長なのだ。

委員長業を完璧にやりすぎた弊害でもある。

いつだって第三者。

誰かの物語の脇役。

そうした役回りを演じている自分。

周囲が望んでいるのは場を調整してくれる委員長だけで、誰一人、『スマレ』を見てくれていない。

(タケルくんを好きになって変わったと思ったのに)

他の二人よりは周囲と適応できる、と思っていたのに、結局は彼女達だけで強い友情を育んでいて、やっぱり自分は置き去りだ。

二人はどんどん魅力的になっていく。

今までのどこか他者を跳ねのけるような空気は払拭され、徐々に他の友人も増えていくかもしれない。

そうすれば、今はまだ三人のうち誰かを選んではいないタケルだ

って、心が揺れるかもしれない。

(どうしてこんなことになったんだろう?)

どうして。

どうして。

それだけが頭の中を駆け巡る。

その時、ガラガラと音を立てて、居室の扉が開き、一人の少女が姿を見せた。

「おはよう」

「あ、おはよ、トーコちゃん」

「ん、おはよ、チカ」

いつもと変わらない緩さでチカに挨拶して自席に向かうトーコ。

それに傍にいたミナコとリツカがちょっと反応した。

トーコは目を向けずらしなかったが、二人は一瞬会話を途切れさせた。

(そうか、彼女だ)

彼女が、トーコがいたから。

トーコがミナコを追いつめたから、それを庇おうとリツカが前に出て、二人は友人になった。

だから。

(彼女のせいだ)

ぎゅっと拳を握りしめる。

彼女がいたから。

彼女がいなかったら、こんな孤独をかみしめなくても済んだ。

その思考がどこか歪んでいることにスマレは気付かない。

気付けない。

初めての恋愛、嫉妬、焦り。

それらが思考を捻じ曲げてしまっていることに。

(彼女がいなければ)

その心の中で呟くスミレの目は暗い闇を宿していた。

17・歪んでいく恋心（後書き）

7/28 誤字修正

大きくてつぶらな瞳。

さらさらの長い髪は艶を帯びた漆黒。

肌の色は白く、細く華奢な肢体はしなやかに動く。

頭脳明晰、スポーツ万能。

街を歩けばモデルや芸能プロダクションからスカウトされる。

その少女こそが、お隣の三兄弟、最後の一人。

末っ子のミコトちゃんだ。

「ねえ、校門前にすごい美少女がいるよ」

「え、何々？」

「あれ、近くの中学の制服だね」

「うわあ、ホント可愛い〜」

ある日の放課後。

下校前の賑やかな教室内でその声は響いた。

窓際にいた女生徒の声に次々と人が窓に集まる。

(聞き捨てならない言葉が聞こえた気がする)

「……………中学生？」

「……………美少女？」

同じだけ沈黙して呟いたのはタケルとトーコだった。

「どうしたんですの？タケル？」

「ねえ、トーコちゃん、もしかして」

そして、ミナコがタケルに、チカがトーコに声をかけたのも同時。

それに二人は揃って『あちゃーしまった』と言いたげに額に手を当てた。

「あー……悪い。俺ちよつと」

「いや、いいよ。タケル。私が行く」

「それで済むはずないだろ」

「それはそうなんだけど、ここは時間差で行こう」

「ああ。そういうことか。了解」

少し離れた位置から、軽く打ち合わせると、手早く帰り支度を整える。

「じゃ、また明日ね。チカ」

「うん。バイバイ。頑張つてね」

「頑張る」

チカと軽く別れを済ませて、トーコは急ぎ足で校門に向かった。

「何なんだ？」

「タケル、中学生の美少女とは何者なんですか？」

？マークを浮かべつつ、新しい女の登場かと不審げな顔になる二人に、タケルが困ったような顔になった。

「うん……多分あいつだ」

「あいつ？」

「あ、もしかして」

はつきりしない物言いのタケルに何か思いだしたスマレが小首を傾げて問いかけた。

「妹さん？」

その単語に、タケルが渋面になる。

それは肯定の証で。

「い……」

「……いもうとおお……!?!?!」

驚愕の声はミナコやリツカだけでなく、窓際に張り付いていたクラスメイトのものも含まれていた。

その反応に。

「もしかして、俺の兄貴がヤマト兄だって忘れてる？」

「あ」

「ごめん、そういやそうだった」

「最近お前の情けない表情しか見てなかったから」

「その納得感が納得できない」

残念なイケメンの面目躍如だった。

校門前には、ざわざわとした空気が漂っていた。

凜とした表情の美少女は服装からも年下とわかっていても、侮ることを許さない何かがあった。

御世辞にも穏やかと言えない表情は、ある種のバリアとなって人を寄せ付けない。

通り過ぎる生徒達は気になって仕方ないのに、声をかけることができないようだ。

そんな彼女にトーコは躊躇いなく早足で近づいた。

「ミコトちゃん」

呼び掛ける声に振り向いた少女の表情が激変する。

冬の険しさから、春の陽だまりに。

表情は柔らかくほころび、瞳は嬉しそうに輝き、鈴を転がしたような声のはじける。

「トーコちゃん!」

小走りにトーコに近づいた少女こそが、三兄弟の末っ子、ミコト、中学一年生である。

近くまでくると、両腕を伸ばしてぴょんつと飛びつく。

トーコは小柄な彼女をしっかりと抱きとめながら、いつも通りの反応に微笑んだ。

「トーコちゃん! トーコちゃんだ!」

「うん。なんか久しぶり。最近登校も早いし、帰りも遅かったみたいだもんね。部活、どう?」

「ぼちぼちな」

「楽しい？」

「うん。でもトーコちゃんと遊ぶ時間がないのが寂しい」

「ぴったりと張り付いたまま答えるミコトに笑みが深まる。

「いつでもうちに来たらいいのに。今度泊り来る？」

「いいの？」

「勿論」

「やったあ！」

「際限なく甘やかすように背中をぽんぽんと叩いてあげると、嬉しそうに頭をぐりぐりすりつけた。

「でもどうしたの？学校まで来るなんて」

「あ、そうだ！ソレ！」

「ドレ？」

「トーコの切り出した疑問にミコトががばつと顔を上げた。それにすつとぼけて聞いてみる。

（本当は見当がついているんだけどね）

勢いをそぐために。

そのつもりで問いかけた質問に、ミコトは表情を真剣なものにした。

「トーコちゃんをいじめてる人ってどの人？」

「ぎゅつと眉間に皺を寄せて、真っ直ぐにトーコを見て聞く。

「……うん？」

「予想以上に情報伝達が歪んでいた件について。

「いじめられてる？私が？」

「違うの？タケル兄のストーリーカーに苛められてるって」

「ストーリーカー……これはまた」

誰だ。

伝言ゲームの途中で内容を過激に改変したのは。

空を仰いでため息を零して、改めてミコトを見下ろす。

「いやそれは…」

そんな事実はない、と説明しようとしたトーコの後ろで、怒りに震える声が響いた。

「苛められているのはコチラの方ですわ！」

振り返ると、顔を真っ赤にしているミナコと硬い表情のリツカ、困惑した表情のスミレがいた。

そしてその後ろで肩を落とすタケル。

(あのバカ。せっかく時間稼いで怒れるミコトちゃんの鎮火に取り掛かろうとしていたのに)

「ごめん、と手を合わせている様子から、なんとか止めようとしたのだろう。」

自分が退室したあとの反応など知れている。

?ミコトちゃんが妹だとバレる。

?タケルの妹に挨拶を。

?トーコと親しいことで色々吹きこまれてはたまらないので一刻も早く。

?制止するタケルを振り切って到着。

おそらくはこんなところだろうとトーコは推測する。

そして、それは誤りのない事実だった。

18・美少女来襲（後書き）

三兄弟最後の刺客、とかついうっかり書きそうになりました。
四天王最後の刺客、的な。

となるとタケルは「ふ、あいつは三兄弟の中での最弱の男。ヤツを倒したところで調子にのらないことだ！」なポジションにな、うわ何をするやめry

19・逆鱗(前書き)

ミコトちゃんが暴走します。
割と論法や考え方が無茶かもしれない。

「人聞きが悪いにも程があります！」
声を張り、辺りにも響き渡る声で云い放ったミナコにため息が零れた。

「私達がいらないところでそんなことを吹きこむなんて」
リツカもまた厳しい顔でトーコを見る。
ただスマレは空気が多少なりとも読める人間らしく、ちょっと困った顔をしている。

説明しかけていたトーコに気付いているのだろう。
だが。

そのリアクションだけで、ミナコとリツカがトーコと敵対していると確信していたミコトの表情が硬くなった。

(ああああ……。説得が難しくなった)

トーコとしては、彼女達を特別に嫌いなわけではない。

ただ、タケルの害となるものなら排除するが、更生可能であり、又、タケルの成長により制御可能になればそれで十分なのだ。

端的に言おう。

正直なところ、彼女達はどうでもいい、というのが本音だ。

情のない酷い言い方に聞こえるかもしれないが、そこが本音で、タケルになんの害もないなら放置してもかまわないのだ。

その感情が行き過ぎている自覚はある。

タケル、ヤマト、ミコトの三人を自分にできる数少ない方法で守ること、支えることがトーコの使命であり、三人が幸せになることがトーコの願いだ。

(やっと、ちょっとマシになりかけてたのに)

このまま放置するとまずい。

完璧にミコトが敵視することによって、事態が悪化しかねない。

「貴女達は誰ですか」

「ミコトちゃん」

トーコを守るようにその脚を踏み出して庇い、ミコトが鋭い声を発した。

それはまさしく誰何と呼ぶにふさわしい声音で。

明らかかな敵意を感じた三人がたじろぐ。

敵を認識した時のミコトをよく知っている。

ミコトがそうなるのは、大抵トーコに何かがあった時だ。

実は三兄弟の中で一番ミコトが過激だ。

トーコを守るうとする時、彼女は小さくとも誇り高い女騎士となる。

「貴女達はトーコちゃんの敵ですか」

「わ、私達は……」

「貴女達がタケル兄にまとわりついている人たちですね」

「っ！ まとわりつく、だなんて」

「そうなんでしょう？」

「私達はタケルを好きただけだ！」

畳みかけるようなミコトを睨みつけながら、リツカが言い切る。

言ってやった、と言わんばかりの表情。

「まだ子供の君には恋愛というものがわからないかもしれないが……」

……
年上の余裕を見せるように言うリツカ。

リツカにしてみれば、自分の弟妹とさほど変わらない年の女の子だ。

外を駆けずりまわる無邪気で奔放な弟妹は、未だこつした恋愛沙汰と程遠く、幼く見える。

リツカ自身、この思いは他とは違うのだという熱情に浮かされた部分があり、舞い上がっていた。

恋する自分に酔っている箇所も多分にある。

だからこそ、少しばかり、見下したような思いがあることを隠せなかった。

何も知らない子供だからそんなことをいうのだと。

ミコトがそんな普通の同年代とは違うことを知らずに。

同年でも小柄なミコトと、やや長身のリツカでは頭二つ分も身長が違う。

そんなリツカを、ミコトは真っ直ぐに見詰めた。

自分よりもずっと大きな彼女をを臆することなく見上げ。

「はっ」

鼻で笑った。

「なっ!？」

ミコトの態度にむっとしたのがすぐに顔にでるリツカ。

良くも悪くもリツカは体育会系。下の者は上に従うべしを地で行く。

そんなリツカにとってミコトの反応は怒りを煽るものだった。

ミコトにしてみれば、頭から見下ろした対応そのものが反発の原因だったのだが、それが当たり前と思う彼女には伝わらない。

ずっと目を細めたミコトの周囲には冷気すら漂うようだ。

「タケル兄が変わったの位、妹の私だって知ってます。でもタケル兄のいいところははずっとずっと昔から変わらなかったものです。ただ表に出やすくなっただけです」

「え?」

そのミコトの言葉に一番驚いているのは、タケルだった。

何しろ、ミコトはヤマトの言うことは割と素直に聞くのに、タケルと喧嘩することが多いのだ。

それもまた、ミコトの愛情表現であり、甘えなのだが。

「貴女の顔、見たことあります。ヤマト兄の道場の試合で見かけました」

リツカの通う道場とヤマトの通う道場は同じだ。

尊敬する先輩の妹、と改めて気付く。

そういえば、よくよく思い出してみると、試合の応援に兄弟が来てるのを見かけたような。

記憶を探るような表情をしたりリツカに、冷然と微笑む。

「そこに、タケル兄もよく応援に来てたの、知ってました？」

「え」

ぎくりと肩が揺れる。

記憶にない。

いや、兄弟が来てたのは見かけたことがある。

美少女の訪れに皆がそわそわしているのを一喝したことがあるからだ。

だがそこにタケルが？

それを指摘されて感じた後ろめたさ。

接触がないのだから無理もないのだが、ミコトの目には責め立てるような強い光があった。

「今更」

吐き捨てるように厳しい口調で。

「今まで視界にすら入れずにいたくせに」

「それはっ！ そうかもしれないけど……い、今からでも知っていいところにいるところで」

「へえ？ 例えばどんなことを？」

「だから何が好きかとか、嫌いか、とか」

「……………浅あい」

慌てて弁解しようとするリツカを、笑って叩き斬る。

「タケル兄がどうすれば幸せになれるかとかは？ 足りないものは何で、どうしたら、タケル兄の為になるかとかは？」

「……………っ！」

「トーコちゃんがタケル兄に…………私達にしてくれたのはそれです」
その一言に言葉を失った。

だってそれは普通の恋する乙女の間を一つ超えている。

自分のことを好きになってほしいから、相手の好きなこと、嫌い

なことを知る。

それは恋愛としては正しい形だろう。

ミコトが言うのはどちらかと云えば、兄弟や親の感覚に近い。

そして、それはトーコが。

トーコが、ずっとずっと気にかけて続け、陰日向に手助けしてきた部分だった。

「トーコちゃんがタケル兄に近づくのがそんなに嫌ですか。それこそ今更です。タケル兄とトーコちゃんがどれだけ一緒の時間を過ごしてきたか、トーコちゃんが私達の為にどれだけ心を配ってくれたか」

「……………」

「なんにも知らない癖に」

真っ直ぐに相手の目を射抜く強い眼光で。

「トーコちゃんがタケル兄に恋愛感情がないことなんて、私にだって分かる。それなのに貴女達にはわからないんですか。その目は節穴ですか」

「……………」

断言するミコトに何も言い返せない。

心の奥底にはまだ疑う心があるのだ。

タケルを好きだから、こちらを傷つけてくるのではないか？

やっかみ、嫉妬で意地悪をするのではないか？

素直に忠告を受け入れられないのは、その感情が原因だ。

「その程度の人間がトーコちゃんをいじめるなんて言語道断です」

「……………いやだから、それは」

ふんと鼻を鳴らして言ったミコトに、ようやく口をはさむ。

「苛められてないってば」

臨戦態勢、と一目でわかる仁王立ちのミコトに後ろから両腕を回す。

「……………へ？」

それに、急に気が抜けたような声を上げて、ミコトが見上げた。

毛を逆立てて怒る猫を宥めるように後ろから包み込んで、困ったように笑う。

「苛められて、ないの?」

「うん」

「い、苛められているのは、こちらの方ですわ」

震える声で口を挟むミナコをちらりと見て、もう一度、上から覗き込むように見下ろすトーコを見る。

「ホント?」

「ホント」

小首を傾げて問うミコトに、苦笑のまま頷く。

「今ちよつと話してみてもわかったでしょ? このコらに私が苛められると思う?」

この程度の連中に、という声が含まれていたのは気のせいではないだろう。

トーコの言葉にミコトはちよつと考え込んで、それからにっこり笑った。

「そういえばそうだね!」

朗らかと言える笑顔は、さっきまでリツカに向けていたものと正反対だ。

その様子にやれやれと肩から力を抜く。

「リツカさん」

「……」

トーコがそう呼ぶ、リツカはびくりと震えた。

「……余り、年下だからと見くびらない方がいい。年齢に関係なく人を見なくちゃ。姿形に惑わされると痛い目見るよ。……ってもう今見たか」

なでなでとミコトの頭を撫でながら、呆れたように言っ。

普段のミコトはここまで暴走しない。

させたのは、ミコトを見くびったリツカの発言だ。

ミコトは可愛い。

その可愛さは、逆にミコトの性格を否定する。

『可愛い可愛い、おとなしいお人形のような女の子』

そんな周囲の第一印象は、ミコトがイメージと違う行動をするだけで非難され、時に変質を強制してきた。

それにどれほどミコトが傷ついたか。

だからミコトは、上から押さえつけられることに対する拒絶反応が激しい。

(簡単に最悪な引き金引くんだもんなあ、もう……)

内心ではため息を禁じ得ない。

トーコの内心に構わず、大好きなトーコに頭を撫でられるミコトが微笑む。

「トーコちゃんが苛める方なら、別にいいや」

「いいやって……その人は私達を苛めるような人なんですのよ?」「だって」

あっさりと言ったミコトにミナコが慌てて言葉を重ねる。

それにすらさらりと。

「トーコちゃんが、意味もなく苛めるはずないもん。なんかしたんでしょう? 貴女達が」

「……………」

授業妨害に、周囲との確執を深める大騒動の数々。

まったくもって否定できない。

否定できないということは自覚できているということであり、前進の証でもあるわけだが、それを一々言ってあげるほど、トーコは優しくも、面倒見が良くもない。

冒頭の言葉を繰り返すが、彼女達はどうでもいいのだ。

大切なのは、タケルと、ここにいる可愛くて凛々しくて、プライドが高い大事な宝物。

まずは心配をかけたであろうこの少女を労り、甘やかさなくては。

「じゃあ、帰るうか、ミコトちゃん」
「うんっ！」

ほんぽんつと背中を叩くと、ミコトが嬉しそうに声を弾けさせた。くるつと身を翻してミコトの片腕に飛びつくように絡みついた。

もはや他の者などどうでもいいという思いが溢れているミコトを優しく微笑んで見てから、立ち尽くす三人と、額を押さえたままため息をつくタケルを見る。

「そういうことだから。ばいばい」

返事は返ってこない。

タケルが無言で行け行けと手を振るだけだ。

何とも言えない気まずい空気に、何事かと足をとめていた数人の生徒も慌ててその場を離れる。

そのまま、遠ざかる二人。

後ろ姿だけを見ると仲の良い姉妹のような二人が視界から消えるまで、リツカは齒を食いしばって立ち尽くしていた。

19・逆鱗(後書き)

実はミコトちゃんが一番の過激派です。

8/8 誤字訂正

20・麗しの女性

日曜日の昼間。

トーコはのんびり過ごしていた。

特に用事もないし、後で近くの本屋を覗きに行こうかな、などと
考えながら部屋でごろごろする。

至福の時だ。

お隣は今日は静か。

ヤマト兄は生徒会絡みの用事、タケルはあの三人に付き合っ
てどこに出かけているようだし、ミコトもまた友達のところな
のだろ

う。

(重畳、重畳)

平和とはかくも素晴らしい。

そんな益体もないことを内心で呟く。

「トーコー！」

そんなトーコを呼んだのは母だった。

声が発せられたのはキッチン。

「何？」

首を傾げながら足を踏み入れたキッチンには美味しそうな香りが
充満している。

その香りの元を探し視線をめぐらすトーコに、母は一つの指令を
下した。

「お隣におすそ分け持ってってちょうだい」

「今日はロールキャベツ？」

「そうよー。今日はハナちゃんも帰ってるみたいだから多めにし
ていたの」

「了解。届けてくるー」

「よろしく言っといてねー」

「はい」

言われて差し出されたタッパーを受け取る。
のんびりした口調の母に頷いて玄関に向かう。

「ハナさん帰ってるなんて珍しい……」
母にとつては友人であるハナちゃん。

彼女はタケルの母親だ。

「お邪魔しまーす」

チャイムも鳴らさずに玄関を開けて室内に声をかける。
返事はない。

「トローコですけど、おすそ分け持ってきましたー」

……。

やっぱり返事はない。

「仕方ないか。あがりますねー」

小さく吐息をついてサンダルを脱ぐ。

勝手知ったる他人の家とは正にこのことで、タケルの両親からも
自由に出入りしていいと許可をもらってる。

悪びれず家に侵入して、冷蔵庫のあるキッチンを目指す。

その途中で。

「あ……」

思わず上がりかけた声を慌てて押さえた。

ダイニングキッチンに続くリビングのソファアに人影を見つけた
からだ。

ちょっと広めのリビングはこじんまりした庭へと繋がるサッシが
あり、そこは開け放たれ網戸にされていた。

さらりと頬をくすぐる心地よい風は、そこから流れ込み廊下へと
そよぐ。

壁紙に合わせたベージュのソファアに横たわるのは、少し光沢の

あるグレーのスーツを着た女性。

艶やかな黒髪はサラサラのストレート。胸元くらいまであるそれが重力に従い、床に数筋流れている。

しなやかそうな肢体は、出るところがでて、へこむべきところはへこんでいるニスバディで、整い過ぎた美貌は目を閉じていて尚よくわかる。

とても三人の子供を産んだ母親とは思えない。

しかし、その女性こそがお隣の三兄弟を産見落とした三児の母、コノハナだった。

「……………もう」

ふう、とため息が零れる。

しょうがないなあ、と内心で呟いて、ひとまず近くのテーブルにタッパーを置いて隣室へ。

御座敷のある隣室の押し入れを開け、薄手のタオルケットを取り出したトーコは、極力足音を殺して傍に歩み寄った。

ふわり。

そんな柔らかさで無防備に眠る女性を包み込む。

寝息と寝顔を確認。

起きた様子はない。

やれやれ、と吐息をついて、改めて、足音を殺してダイニングキッチンへと向かった。

コノハナがこんな昼間に家にいることは稀だ。

普段は夫の経営する貿易会社で、やり手営業として日夜忙しい日々を過ごしている。

その仕事は経営や経済に詳しくないトーコでも推測できるほどに過酷だ。

その為、家に帰れないこともしばしばあり、その間三兄弟はトーコの家に預けられていた。

これもまた、トーコと三兄弟が根強い兄弟感覚を与えた原因の一つであろう。

(今日も疲れてるみたいだなあ……)
顔よし、スタイルよしの美女で、更に言う人当たりも良く頭もよい才女だ。

完璧と呼ばれ、憧れと言われ、高嶺の花と遠巻きにされる。

だが、トーコにとっては、夫を助ける為仕事に全力を尽くしながらも、子供達へ割く時間をどうにか捻り出そうと奔走する、ちよつと無理をし過ぎるとこのある女性だ。

冷蔵庫にロールキャベツ入りのタッパーを収納しながら、しみじみとため息。

(もうちよつと肩から力を抜いてもいいのに)

気遣わしげな吐息を零しながら思考していたトーコの耳に、くすくすという押し殺した笑い声が聞こえたのはそんな時だった。

「……？」

ソファアの上には横になったコノハナの姿。

それは先ほどと全く変わりがなく……。

(いや、ちよつと姿勢が変わってる……？)

「……起きてますね？」

確認するようにそう問いかけると、ほっそりとした指先が動いてタオルケットの端を掴み、口元を隠すようにくいつと引き上げられた。

悪戯っぽい光を宿した瞳が笑みに和らぐ。

「つてか、寝たフリしてたんですか？ 『おばさん』」

「酷いトーコちゃんっ！ コノハナさん、又はハナさんって呼んでつて言ってるのに！」

「はいはい、コノハナさん」

表情豊かに答える彼女の傍に歩み寄る。

近づくトーコを目で追いながらも動く気配がないコノハナに苦笑した。

さらりとした手触りのい草仕立てのカーペットに膝をつく。

コノハナの長い黒髪は重力に従い、肩口から下へ。

そのカーペットにも触れていて、ふとそれが気になったトーコは無意識に指で掬いあげて、整えた。

「んふふ、ありがと、トーコちゃん」

「いいですよ。……それより、部屋に戻って寝た方が」

「んー……もうちょっとココがいいかな。風が気持ちよくて」

「でもスーツも着たままで」

さわさわと吹き込む風を感じるように目を閉じるコノハナの目の下には、うつすらとした隈くま。

化粧で隠されているソレが見えて深いため息が零れた。

「本当に、ヤマト兄といい、タケルといい、コノハナさんといい…

……。頑張り過ぎ！」

自分には手伝えない事で無茶ばかりする三人に本音が漏れる。

普通な自分のもどかしさ。

どうすればこの人達を助けられるのか。

考えても考えても足りない。

手が届かない。

「心配ばかりかけてゴメンネ？」

思わず表情を曇らせてしまったのだろう。

そんなトーコを愛おしげに見つめて微笑む。

幸せそうな微笑みだ。

「何ですか」

「うっん、なんでも」

緩く首を振るコノハナを訝しげに見る。

トーコは分からない。

当たり前すぎて。

コノハナは伝えない。

無意識の慈しみ。

無条件の心配。

無制限の愛情。

それが嬉しかったから、なんて。

それらが与える安心感は、確かに依存したくなる。

ある意味において、トーコの当たり前の愛情というものには、麻薬に近い魅力があるのだということ、トーコが自覚する日は多分こないのだろう。

21・家族の絆

「そんなに心配してくれるなら、仕事やめちゃおうかなー」
ぽつりと零した呟き。

それにちよつと驚いたようにコノハナを見て。

次いで苦笑する。

「できないでしょう?」

「うぐ……」

「仕事、楽しいでしょう? おじさんの力になれて、傍で仕事してるの、嬉しいでしょう?」

「うづう……」

「ヤマト兄やタケル、ミコトちゃんには私も、私のお母さんもいる。だけど一人で修羅場ってるおじさんを放ってなんかおけないでしょう?」

「……あう……」

朗らかに笑うトーコに返す言葉もなく。

「いいんですよ。無茶さえしないでくれたら。ちゃんと、帰ってきてくれるんなら」

あの三人だつて分かつてる。

そう言ったトーコに苦笑するしかない。

「トーコちゃん、お母さんみたい」

「お、お母さん!? いくらなんでもそれはっ」

最近、タケルの小姑で、ヤマトの世話焼き婆みただと実感していたトーコに渾身の一撃。

がつくりと手について衝撃を受ける。

「いいじゃない。家族みたいだつて思ったんだもの。ミコトだつて家族の絵にトーコちゃんを描いたくらいなもの」

へこんだ様子を見せるトーコを軽く笑う。

その様子に深い意味……年齢的なことではないのだと分かつてた

め息。

そして、新しい話題の一つに反応して言葉を濁らす。

「あの絵の時の事件は……まあその」

「シヨックだったわね」

「いやいやいや！ だからアレは勘違いだったでしょ！？」

ソファーから起き上がりつつ、頬に手を当て、憂鬱そうな表情を作ったコノハナに慌てて弁解する。

思い返すのは三年前。

ミコトの小学校の課題で、家族の絵というものがでたのだ。

ほとんどの生徒が父母と描いていたらしい。

そんな中、ミコトが提出した絵には、ヤマトとタケル、そしてトーコが描かれていた。

ミコトの両親が多忙であることを知っていた担任はそれをいたく心配したのだ。

娘さんとのコミュニケーション不足では、と家に連絡をしたことで、焦ったのは父と母。

家族として認められていないのではないか、余りにも放任過ぎて、逆に自分達の方が見限られているのではないかと落ち込む事件があったのだ。

結論から言うと、完全なる行き違いだった。

ミコトはちゃんと父は母の絵も描いていたのだ。

父の絵、母の絵、兄弟とトーコの絵の三枚。

その内一枚を提出するにあたり、父の絵だけ、母の絵だけ提出することが選べず、それらは両親に直接渡すつもりだった。

そして、残った兄弟とトーコの絵を学校へ。

余り構ってやれないことに罪悪感を感じていた二人は、目を潤ませて絵を受け取っていた。

それは二人の寝室に、今も大事に飾られている。

以来、二人は無理やり休みをもぎ取っては家族サービスをしている。

「と、とにかく。少し休んでくださいね」
「はい」

慌てて話をそらすように言ったトーコにわざとらしい良い子のお返事。

それを受けて立ち上がる。

「帰る？」

「だってコノハナさん、私がいると休んでくれないんだもの」
また来ますから、と言い添えて笑う。

そして小さく手を振ると、部屋から出ようとする。

その背中に、コノハナが言葉を投げかけた。

「ねえ、トーコちゃん」

「はい？」

呼び掛けに振り返ると、先ほどまでの楽しげな表情とは違つ、真剣な表情。

「お母さんがダメなら、義妹でどう？」

「――」

その台詞を聞いて、息を呑んだ。

不意打ちに表情を強張らせ、びくりと震える。

「お義姉ちゃんって呼んでいいんだよ？」

「　　、それは」

苦しげに表情を歪める。

そして、何かに耐えるようにぎゅっと目を閉じ、指先を胸元で組み合わせる。

その指にどれだけの力が込められているのか。

白くなる指先に、コノハナの表情が痛ましげになる。

心に到来した嵐をやり過ぎそうとするかのように数秒動かず。

否、動けず。

「それは、ダメです」

一言、一言を絞り出すように言って。

ゆつくりと目を開けて、微笑んだ。

「サクヤさんが私を好きになってくれるまで、は
苦しげに微笑う。」

努力して、頑張つて、一生懸命作った笑顔。
笑顔とは言えない笑顔。

それにはコノハナも何も言えなくなつた。

「それじゃあ、お邪魔しました」
くるりと身を翻して部屋を出る。

そのまま家から出ていく気配を送つて、コノハナはその美しい顔
に不似合いな舌打ちをした。

「ああもう、あのバカ弟！」
吐き捨てるように言う。

そして。

「トーコちゃん……」

一転、氣遣わしげにトーコの名を呟く。

駆け足で大人になろうとしていたのに、ぴたりと足を止めてしま
つた少女を思い、ため息を零す。

そのため息は爽やかな昼下がりの中、重たく沈んでいった。

22・大好きな気持ち（前書き）

お気に入り登録1000件突破いたしました！！
皆様にのご愛読に感謝します。

ありがとうございます！

22・大好きな気持ち

彼は誰の目から見てもスーパーヒーローだった。
その上で、一人の悩み多き少年だった。

『ヤマトー！ タケルー！ 遊びに来たぞー！』
そういつて、朗らかな笑みと共にお隣を訪ねてくる彼とトーコが出会ったのは、11年前。

トーコが4歳、サクヤが14歳の時だった。

タケル達の叔父とはいえ、おじさんと呼ぶには若すぎる彼を、皆サクヤ兄ちゃんと呼んではじゃれつく。

そして、そんな甥っこ達を屈託のない笑みで構い倒し、遊んでくれた。

そんな彼に好意を抱かない人などいない。

勿論、トーコもその一人だ。

タケルとワンセット扱いの多かったトーコもまた、サクヤにとっではもう一人の親戚、姪のようなものだったのだろう。

同じようなレベルで、一緒になって遊んでくれるサクヤが大好きだった。

それでも出会った当初の『好き』には恋愛感情など付随していなかったと思う。

その感情が変化したのは、5歳の時の火災だ。

シヨップینگセンターに取り残されたトーコを、我が身の危険も顧みず救い出してくれたのはサクヤ。

彼はまるで正義のヒーローのようだった。

痛む喉で、それでもたどたどしいながらも感謝を伝えようとした

トーコに向けた、あのすがすがしい笑顔。

見た瞬間、胸の奥がぎゅっと締め付けられるような感覚を覚えた。それが、早すぎる初恋だった。

大好きだと惜しげもなく伝えてじゃれつき始めたトーコを、サクヤは、はにかみながらも可愛がってくれた。

嬉しくて、楽しくて、幸せで。

だけど、気付いてしまう。

十も年下の少女が、至ってノーマルなサクヤの恋愛対象に成るはずがないのだと。

一緒にいても、兄弟と思われるのが関の山。

勿論、それで正しいのだ。

それが、正しいのだ。

そんな幼い少女を対象にする方がおかしい。

自分の思いはかなわない。

それに傷つくトーコの方が、可笑しい。

どうすれば、この距離はなくなるんだろう。
どうすれば。

小学校に上がり、低学年、中学年と年を重ねても色褪せない思いに、心の中がぐちゃぐちゃになって、サクヤを遠ざけたこともある。

(だって、サクヤさんはどんどんカツコよく成っていく)

(いくら年を取ったってそれ以上の速さで遠くなる)

(彼にはいつだって綺麗な女の子が傍に行きたそうにうずうずして
る)

だから、もう無理だよ、と自分に言い聞かせる。
だけ。

ああ、だけ。

そんなトーコの相談相手になってくれたのは、コノハナだった。タケル達の母で、サクヤの実姉。

『トーコちゃん』

目を細めて、愛おしげに。

頭を撫でながら名前を呼ぶ。

『サクヤはね、トーコちゃんが思ってるような人間じゃないかもしれないよ？』

トーコの想いを否定するような言葉を口にしながら、それでも声は慈しみに溢れていた。

『もっとサクヤのことを見つめてみて？』

『そして、サクヤが欲しがっているものは何なのか、考えてみて』
歌うような涼やかな声で、トーコの心を揺さぶる。

『サクヤがどんなことを喜ぶか、どんなことに傷ついているのか、どんなことに幸せを感じているのか』

私は、そうしたの、と幸せそうに言う。

コノハナも又年の差カップルだったのだ。

実は7つ年上の男性にアタックし、見事射止めたつわものである。

コノハナが彼とであったのは15歳の時、すぐに好きになった。

そこから3年かけて恋仲になり、18歳の時、高校卒業と同時に駆け落ち同然で家を出て、同棲を始めた。

その為、父からは勘当されている身である。

年を経てもまだ夫に恋し続ける、云わばトーコの先輩の『恋する乙女』だった。

そのアトバイスを胸にサクヤを見つめた数カ月。

サクヤは他の女性にもすぐくモテること。

一方的な恋情、好意にはひどく冷たいこと。

自分は一応特別扱いを許されていること。

コノハナ勘当後、締め付けを厳しくし、神経質になった父に反発していること。

普通の家族愛に飢えていて、コノハナ宅に来る時はそれを求めていること。

辺りにありふれた恋愛なんかより、家族が欲しい、サミシイサミシイ人。

『コノハナさんのばかぁー！！』

そう言ってトーコがコノハナの元に怒鳴り込んだのは9歳の時。

『もっと好きになっちゃったじゃない』

ぐじぐじと鼻をすすりながら、抱きついてきたトーコを、コノハナが笑いながら抱きとめた。

知れば知るほど好きになって。

そうしたらもう腹をくくるしかなかった。

彼の隣に相応しくあるように。

似合う女性に成れるように。

努力すること。

それしかなかった。

その日から、トーコは大人の女性への道を駆け足で走り始めた。
。 だた、彼の為に

22・好きな気持ち（後書き）

当然のことながら、この話はロリコンを推奨したものではありません。

趣味嗜好は否定いたしません。ダメ、犯罪。

9 / 1 誤字訂正

23・彼の思い

『サクヤさん』

幼いその少女の声は、いつだって愛情と好意で溢れている。

彼女以外ならうざりたいと思ってしまうのに、その声だけは心地よかつたのだと気付くのに、数年を要した。

炎の中から助け出した少女が何の銜てらいもなく、大好き、と繰り返すのはこそばゆく、面映ゆい。

誰かと比べた上での感情ではなく、ただ自分だけを見て、自分だけを『特別』にしてくれる。

自分だけしか知らない。

自分だけしか知らない。

同年代だったら、年上だったら。

重たかったかも知れない。

だけど、十七年下の女の子だ。

いずれ大人になり、周りが見て気が変わるだろう。

だからそれまで、少女が大きくなるまで、その一途な思いを独り占めしても許される。

それに甘んじていればいい。

そう考えていた。

それが彼女、トーコの思いを軽いものとみくびっていることに気付かずに。

当時のサクヤは荒れていた。

何をするも、割と簡単にできてしまつて手ごたえはなく、それによつて集まる嫉妬を初めとした悪感情は直接ぶつけられることがないゆえに、遅行性の毒のように周囲とサクヤの精神を蝕んだ。

わかつてくれる友人もおらず、親はむしろそんな無能は切り捨てる、もつと高みを目指せと口うるさい。

やたらと構いたがる女子もまた一方的で、サクヤの気持ちをおろろろとする者もない。

ましてや、ステータスとして、周囲に自慢できる彼氏としてのサクヤを欲しがるものすらいた。

いつも一人でイライラして、全てを否定して。

そんなサクヤが唯一くつろげる場所。

そこが敬愛する姉の家だった。

父は姉のことを、度し難い、どこの馬の骨とも知れん男の元にいた親不孝者、ああはなるな、と散々に罵倒した。

由緒ある我が家の能力を受け継いだお前は完璧であれ。

他者に負けるなかれ。

そう繰り返す父に反発して喧嘩になるたびに逃げ込んだ、温かい家。

顔を見せると嬉しそくに駆け寄る子供たちが、心配げに労わってくれる姉と義兄が救いだった。

その場所だけで、サクヤは笑顔でいられる。

子供たちとは一緒になつて遊んで、時にヤマトとタケルに武術の稽古をつけた。

最初は驚いた。

彼らは自分から、戦い方を教えて欲しいと言ってきたのだ。

『強くなりたいんだ。だからお願い』

真剣な顔の二人の、強くなりたい理由。

それは母を、妹を、幼馴染を守る為。
強制的に覚えさせられた、自分とは違い、彼らの意思で。

頭をガツンと殴られたような衝撃が、サクヤを襲った。
幼い甥っ子達は、強くなる為、成長する為、努力している。

では、自分は？

父に噛みついて、世を拗ねているだけか？
他者を遠ざけて、全てを否定しているだけか？

(変わらなければ)

今のままでは、子供たちにも劣る。

(進まなければ)

今の自分に、彼らの真っ直ぐな憧憬を受け取る資格はない。

自分で自覚した弱さ。

みっともない、浅ましさに恥じ入る。

そんな自分にかけられた言葉。

『サクヤさん』

真っ白のワンピースを着た少女はまだ小学生だった。

『私ね、決めた。私は何も人に自慢できる特技なんてない、普通の
コだけど、私も何かを守る人になる』

にっこりと笑った純粋な笑顔。

『私は、サクヤさんが大切にしているものを守るようになるよ』

その言葉に呆けたように口を開けた。

『サクヤさんが大切なもの。家族。私は、私にできる方法で、ヤマ
ト兄やタケルや、ミコトちゃんを守る。コノハナさんも無茶しない

ように見とく』

ぐつと小さな手で拳を作って。

『頑張るね！ 私も』

相変わらずぽかんとしたままのサクヤを置いて、ちよつと恥ずかしそうに笑った後、トーコは駆けていった。

それを見送って、数秒。

膝が砕けたようにしゃがみこむ。

(ああもう。完敗だ)

ここまで言われて、見せられて。

ただいじているわけにはいかないじゃないか。

彼らに相應しいように。

サクヤは、ようやく歩き出すことを決めた。

大学で知り合った人物を通じてあるアメリカの会社にスカウトされたサクヤが、コノハナ宅を訪れることは減ったが、長期の休みが取れるたび、逢いに行った。

自分のスタート地点を確認するように。

その頃には甥っ子二人と、トーコは中学生、ミコトも小学校に入っていた。

逢うたびにどこかしら、色気のような物を感じさせるようになっていったトーコが未恐ろしいと思いつつも、もうそろそろ他に気になる男子くらいいるのではないかと思いつつ始めていたころだった。

長期休暇をゆっくりとコノハナ宅で過ごし、アメリカに帰るその日。

トーコもまた見送りに来た。

上半身の体格がはつきりわかるワンピースをきた少女の胸元が、女性らしくなってきたことに気付いて、どきつとしたのはここだけの話だ。

『じゃあ、またな。休み取れたら来るから』

いつものように笑って、軽く手をあげる。

そんなサクヤを、いつになく真剣な顔でトーコが見ていた。

『ん？ どうかしたか？』

『ううん。……………あのね、サクヤさん』

『おっ』

視界の端、にやにや笑っている姉に嫌な予感を覚えつつ向き直ると、真っ直ぐにサクヤだけを見て、トーコは言った。

『行ってらっしゃい。サクヤさん。それと、』

すうっと一回息を吸い込み。

『大好きです』

『ぶっ！？ え、な！？』

今まで何度も繰り返された愛の言葉とは違う。

その一言に込めた思いの重さが分かる声音に、かっと顔が熱くなるのを感じた。

周囲にいた他の子供らも、顔を赤らめてびっくりしているのも視界に入らない。

そんなサクヤを、当のトーコはちよつと驚いたように見て、コノハナの方を見る。

コノハナは大成功、と言いたげな満面の笑みだった。

『姉さん！ トーコに何吹きこんでんだよ！』

『なあによ。あんたがなんの動揺もしなかったら、もう諦めなさいと説得しようと思ってたのよ』

『ちよ！？』

とんでもないことを言い出す姉にひきつった表情になる。

そして、ちらりとトーコに視線を戻すと、トーコもまたサクヤを見ていた。

『……………ええと、だな』

真っ直ぐな視線にちよつとたじろぐ。

そんなサクヤを見て、トーコは、ちよつと悪戯っぽく笑う。

『少しは脈あり?』

ちろつと見上げる上目づかい。

『~~~~~っ!?!? い、行ってきますっ!』

『はい、行ってらっしゃい』

引きとめることもせず、朗らかに送りだすトーコを前に、逃げるように家を飛び出した。

それが、最後の逢瀬だった。

「おい! 起きろってサクヤ!」

「……あと五分」

「ふざけんな! 起きろ!」

「ぐお!?!」

ごつと凄い音を立てて振り降ろされた拳に、呻いて起き上がる。

「何しやがる! このまま死後の世界に行くかと思つたわ!」

「おーおー、『行ってらっしゃい』」

「……………」

「なんだよ」

「『大好きです』が足りない」

「ああ!?!」

「いや、お前じゃ役不足だな。忘れる」

「寝ぼけてんのか、全く。それよりいきなり魔物の数が減つた理由がわかつたぜ」

「お?」

「ごそごそと寝具を片づけ出すサクヤの背中に、今仕入ってきたばかり

りらしい情報を躊躇わず口にした。

「勇者だ」

「ああん？」

「異世界から召喚した勇者が、魔物のゲートを塞いだらしい」

「……異世界？」

その単語に表情が真剣になる。

「ああ、北の国の姫さんが召喚した、タケルっていう名前の勇者が世界を救って、自分の世界に帰ったんだって言う話が……」

その話を最後まで聞く前に、サクヤはがばりと振り返り、がしつと肩をつかんだ。

異世界。

タケル。

それは自分の大切な家族であり、心優しい甥っ子の

。

「詳しい話を聞かせてくれ！」

すがりつくようにして叫ばれた声は、二人が野営していた森に吸い込まれるように響いていった。

23 ・ 彼の思い（後書き）

しつこいようですが、この話はロリコンを推奨するものではありません。

しかし、少女の白ワンプは正義だとおもっています。

24・憧れと理想のフィルター(前書き)

大変遅くなりました。
お待たせして申し訳ない。

24・憧れと理想のフィルター

リツカは無心に竹刀を振っていた。

否、無心になろうと振り続けていた。

場所は昔から通い慣れた道場。

繰り返し、繰り返し、竹刀を振り降ろし続ける。

こうして素振りを行っているうちに、心は澄み、集中力は増していく。

いつもであれば、その筈だった。

そう。いつもであれば。

だが、今日のリツカの心は何時まで経っても淀みが澄み渡ることはない。

『今更』

鈴振る可憐な声が、冷たく切り捨てるように放たれたあの瞬間が心を離れない。

『視界に入れずらしていなかったくせに』

弁解は、できなかった。

(だって本当に分からない)

その頃の自分には、ヤマト先輩しか見えていなかったのだから。

彼の妹の言う通りなら、自分が心奪われた彼の美点は変わらず存在していたものだろう。

そして、それに気付いてもおかしくはない程度に、自分は接する機会があった。

だけど、記憶にすら残っていないということは、恐らく視界に入っていなかったということ。

今や天敵と言えるあの幼馴染が言っていた言葉が頭をよぎる。

それは最初に、空き教室に呼び出して話をした時の言葉だ。
ヤマトには多くの噂があり、時に無神経なそれにずっと苦しみ、
苦労していたこと。

話を聞いた時には、そんなミハーで軽薄な人間とは違うと思っ
ていた。

だが、ヤマトの強さに憧れ、彼だけで見つめ、彼が大切にすも
の、家族を一顧だにせず視界にすら入れていなかった自分は、本
当に違うと言えるのか。

彼に理想を押し付けていただけではないのか。

『視野が狭すぎる』

それは、トーコがミナコに突き付け、責め立てた言葉の一つ。

泣きながら逃げ出したミナコを追わせないように向けられた強い
視線は、明らかにリツカをも責めていた。

同罪だ、と。

その時は、その視線の強さに気押されただけで、深く考えなかつ
た。

自分は違うと思っていたから。

自分の思いだけは純粹で、特別で、尊くて、許されるのだと思っ
ていた。

何の根拠もなく。

リツカは考えることが苦手だ。

良くも悪くも体育会系。

何事も直感で行動し、それが暴走することもある。

それなのに、いつでもどこかで自分は正しいと思っていた。

ミコトをただ可愛いだけの子供だと見下していたように。

これまでの地追分は本当に正しかったのか。

こうやって見下して、突き放して、傷つけた人が他にも沢山いた
のではないか。

事はもう、ただの恋愛沙汰ではすまない。

自分のあり方すら揺らぐ。

それは、これまで考えることを避けていた自分の怠慢。人を氣遣うことを忘れて、自己弁護に走っていた自分の過ち。他者に対して鈍感過ぎた自分の咎。

「そんな人間が、周りから浮くのなんて、……当たり前、じゃないか……」

ぼつりと零れた言葉が、むなしく空気に解ける。

無意識に零れ落ちた言葉に、じわりと目頭が熱くなった。

顔が、泣きそうに歪む。

いつしか、竹刀を振っていた手はだらりと両側に下ろされていた。打ちのめされて、俯く。

リツカは自問の思考の中で、落ち込んでいるが、それもまたリツカの美徳であることに本人は気付かない。

他者からの、耳が痛い忠告を素直に受け取ることができること。

それに対して真摯に考えることができること。

落ち込んで、後悔して、その後に改善の為に動く勇気を持てること。

ただし、最後の一つに関してはもう少し時間が必要なようだが。

今はただ、自分を見つめ直し、悔やむだけ。

そんな状態でどれくらいの時間が経っただろうか。

「リツカ！」

「っ！！」

不意に道場内に響いた声に、リツカの背筋がびんっと伸びた。

道場の入り口に顔を覗かせ、声を張ったのは一人の青年だった。

「し、師範……」

まだ年若い彼がこの道場の主であり、リツカの剣の師匠である。

「ん、どうした？」

「え、いえ。何か？」

「ああ、ちょっと頼みたいことがあるんだが」

びっくりした顔をしているリツカを不思議そうに見て、歩み寄り、
てくる彼に、肩から力を抜けた。

いつも朗らかで豪快。

気さくで自分の道場に通う弟子達を我が子のように可愛がる彼が、
こうして何某かの頼みごとをすることは珍しくない。

「今日は何事ですか、師範」

「あー、うん。ちょっと他流からの試合を申し込まれてな。それに
ヤマトのやつをあしたいと思ってるんだが」

「ヤマト先輩が他流試合ですか!？」

思わぬ話に声が弾んだ。

表情もぱあつと明るくなって、はつとすると、慌てて表情を引き
締めた。

(い、今先輩に対してミーハーなことをしないって思ったばかり
なのに!)

うづ、と内心で悶えるリツカだが、長年尊敬し、憧れていたヤマ
トのこととなると、今すぐ自分を変えろというわけにもいかないよ
うだ。

しかも最近は竹刀を振る姿を見れていない。

そこまで考えて、ん？ と首を傾げた。

「あ、でも……」

「そう。あいつ、一応受験生だろ。だからな、とりあえず打診とい
うことでこの書類を届けて欲しいんだ」

ぺらりと目の前に広げられた紙には、日程やあちらの参加者の氏
名などが並んでいた。

それにわかりましたと頷きかけて、リツカがぴたりと動きを止め
た。

(……届けるって)

「あの……どこに？」

「ヤマトの家にだが？」

何を分かり切ったことをと、あっさり答えられて思わず言葉を失う。

（ヤマト先輩はタケルのお兄さんで、ヤマト先輩の家ということはタケルの家ということ）

これまでに何度か他の二人もタケルの家に行きたがっていたのだが、さりげなく拒否されていた。

今にして思えば、三人がミコトにはち合わせることを危惧しての事だと分かるが、二人とも大層残念がっていた。

そんな二人に先駆けてタケルの家に行く。

しかも正当な理由があるのだ。

追いつ返されることはあるまい。

と、なれば。

「い……」

「うん？」

「行きますっつー!!」

「お、おお、頼む……」

掴みかからんばかりの勢いで答えたりツカに、師範の腰は引けていた。

25・絶対境界ライン(前書き)

大変お待たせしました。

25・絶対境界ライン

高校にほど近い場所にある住宅街。

その傍にある一つの川を越えた先にタケルの家はある。

さほど大きくない、よくある川。

しかしその川は『絶対境界ライン』と言われている。

リツカはその川に架かる橋を前に緊張した様子でごくりと唾を呑んだ。

「だ、大丈夫。大丈夫。正当な理由があるんだから」

そう自分に言い聞かせるように呟いて、正面を見据える。

ヤマトが手ずから作り上げた親衛隊にはいくつかの厳しい掟がある。

例えば、『ヤマトの周囲の人間に危害を加えないこと』

『上下関係を維持し、相互の利益を与え、損失を発生させた者にはペナルティを課すこと』

そうした掟の一つに、『ヤマトの実家への接近を禁ずる』というものがあるのだ。

その接近限界ラインがこの川。

通称『絶対境界ライン』。

ライン川に掛けているとも言われるこの名称通り、ここを超えて接近する者にはペナルティが発生する。

それはヤマトへの接近を人海戦術により排除し当分は姿を眺める

ことすらできなくなるのだ、ある種の奉仕活動だと色々あるらしい。

その違反者を見つける為、川周囲の家にいる親衛隊員が橋を渡る者を見張っているという噂がまことしやかに流れている。

リツカの今回の訪問の理由はヤマトである。

密かな目当てはタケルであるが、このことで後に面倒なことに巻き込まれるのはごめんだ。

そして、その件ともう一つ。

リツカの緊張の理由があった。

それは、ミコトの件だ。

さっきは条件反射のように請け負ってしまったが、ミコトがいればまた何かしらの問題が発生するのではという危機感。

(だ、だけど、絶好の機会！ こんなこと滅多にないんだもの！)腕の中の書類をぎゅっと抱きしめる。意を決して歩き出した。

その足取りは非常にぎこちないものだったが、誰に呼びとめられるでも、視線を感じるでもなくあっさりと渡り切ってしまう。

すぐに発見した家は塀で囲まれた一軒家。

どうやら小さめながら庭があるらしく、塀の向こうに何本かの木が見えた。

(こ、ここだ)

その家の玄関前に立ち、深呼吸を三回。

そして、震える指先でチャイムを押した。

しばしして室内で誰かが反応する気配があり、チャイムから聞きなれた声があった。

「はい？」

「あ、ヤマト先輩！」

聞きなれたとはいえ、ここしばらくは会っていなかった相手だった。

「あれ？ リツカちゃん」

「は、はい！」

「ええと、タケル、かな？」

「い、いえ！そのヤマト先輩へ道場からの届け物を……」

「届け物？ ああ、ちよつと待って」

不思議そうな声は気負うところがない。

穏やかな声に、緊張していたリツカの気持ちが少し解れた。

時を置かず、がちやりと開けられた扉の向こうには私服姿のヤマトがいた。

「こんにちは、ヤマト先輩」

「うん、こんにちは。お使いお疲れ様。届け物って、ソレ？」

「はい」

にっこりとほほ笑むヤマトに釣られるようにリツカも笑う。

そして、書類を差し出した。

「他流試合の申し込みがあつて、打診したいそうです」

「打診？」

「一応、受験生だから、って」

「ああ……ん……どうしようかな」

早速中身を出して、パラパラとめくり始めるヤマト。

その傍で、リツカはもじもじと挙動不審になる。

初めて訪ねた、初恋の相手の自宅。

あれ、これタケルがいつも履いてる靴だ。

二階がタケルの部屋かな？

そんな思考で目線がうつろする。

その様子を見て、ヤマトが苦笑する。

「やっぱりお目当てはタケル、かな？」

ちよつと悪戯っぽく笑う顔で、自分がタケルを好きなことがばれているのが分かる。

勿論、今更のことだが。

あれだけ他の二人と一緒に騒ぎを起こしているのだから、ばれていないはずがないのだが、長年憧れ、敬愛していた人物にばれてい

るいうこの状況は恥ずかしすぎる。

「いやあのっ！ …… その、あうっ」

軽いパニック状態になって、慌てて下を向く。

だから、リツカは気付かなかつたし、聞こえなかった。

「んー……。ちよつと複雑かな」

そう呟いたヤマトが苦笑と共に、僅かな警戒を見せていたことに、だから察することができない。

（今のところ、トーコに危険を及ぼしかねない三人の内一人が、昔から見てきた後輩っていうのも、ちよつと厄介だな。元々悪い子じゃないのが更に、ねえ）

ヤマトがそんなことを内心で呟いていることに。

「で、あのタケル、君は？」

からかわれながらもそう問いかけたリツカに、表情をのんびりしたものに切り替えて頷く。

「ああ。いるよ。呼ぼうか？」

「え！ いいんですか？」

ヤマトの申し出に声が喜色に跳ねたリツカに苦笑。

本当に分かりやす過ぎる。

素直な反応のリツカを笑いながらも、ヤマトが階段を見上げるように身をよじりタケルを呼ぼうとした。

その瞬間だった。

「ちよつと待って。 …… タケ」

「ちよつ！ おま！？ トーコどうした！！ 待て落ちつけ馬鹿っ！」

悲鳴じみたタケルの声が家に響いたのは。

25・絶対境界ライン（後書き）

私のモチベーションと、軽いスランプのせいで長らくお待たせして申し訳ない。

早くこのスランプと低迷するモチベーションを戻して、元のペースで更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0940u/>

お隣の勇者さま

2011年10月11日01時31分発行